

研究ノート

## カンボジア 2012 年

多賀 秀敏

### はじめに

社会科学部に設置された「紛争解決論実習2」の学生を引率して2012年8月26日から9月4日まで、カンボジアとベトナムとを訪問した。この科目は、テーマ・カレッジ平和学を副専攻として修了するための算入単位に指定され、社会調査士資格認定のための必修科目単位としても活用できる。しかも、昨年に引き続き、文科省のSVへの申請が認められ、参加学生には一人8万円の補助金が支給された。

国際関係の現場では、武力紛争が「終結」したあとに、同様の紛争の再発を防ぎ、軍事衝突で荒廃した国土・社会の復興・開発をめざして、国際組織やNGOなどが中心になって活動している。この活動を「平和構築」と呼称することは、今や定着したとってよからう。社会科学は、座学とともに、臨床的なアプローチも重視しなければなるまい。こうした平和構築の実態を在学中の学生に学ばせる目的で、国際関係論関連の有志でこの科目を設置した。これまで、タイ・ミャンマー国境の難民キャンプや少数民族、東ティモール、フィリピンのミンダナオ島、ルワンダなど、いまだに武力紛争が継続している地域も含めて実施してきた。

年度によっては、「紛争解決論実習1」「紛争解決論実習2」「紛争解決論実習3」と開講することもあった。引率者の関係から、ここ2、3年は、「紛争解決論実習1」「紛争解決論実習2」としている。本年度は、筆者が学務多端なために、1と2を統一して、「紛争解決論実習2」のみを開講した。したがって、現地での訪問先のアポイントメントから、航空券・宿泊予約、文科省への申請に至るまで、すべて「紛争解決論実習2」を例年ご担当される社会科学部の山田満教授にお願いした次第である。山田教授は、実に要領よく最高の実習をご用意くださり現地でも学生をつききりで指導された。ここに冒頭に記して深い謝意を表したい。

以下は、筆者のメモによるその記録である。何の創意工夫もなく、時間軸に沿って記述してある。カンボジアで現在進行している現実のまさしく文字通り眇々たる部分を理解す

る一端になれば、望外のよろこびといえよう。なお、註に相当する部分は、各日の最後に記した。

### 2012年8月26日（移動：東京からシエム・リアップへ）

(0800) 成田 VN カウンター前集合

VN301 TYO-SGN 1215 (1015) TO 1353 (1553) TD

VN3821 SGN-REP 1600 (1800) TO 1644 (1844) TD<sup>1)</sup>

1815 ~ 1845 (2015 ~ 2045) 夕食 カンボジア料理

Borey Sovann Restaurant (金京城大餐厅)

Street Angkor #0243 Slor Kram Village, Slor Kram Committee, Siem Reap

2105 City Angkor HTL チェックイン

City Angkor HTL は、1994 年に開設した比較的新しいホテルである。Air Port Road の新ホテル群のほぼ中央に位置している。ここ数年の Siem Reap におけるホテル建設・改装ラッシュはすさまじく、とくに「新興開拓地」であるエアポートロードの周辺は、ここがカンボジアであるということを疑うような瀟洒なホテル群が軒を連ねている。それでも世界遺産のアンコール遺跡群を擁するシエム・リアップは、まだまだ新築、新規開店の予定が目白押しだという。すなわち観光産業はカンボジアにとって欠かすことのできない主要産業の一つである。

City Angkor HTL のオーナーは、Hun Sen 首相の友人とかで、シエム・リアップで国際会議などがあるときにフン・セン首相の定宿となっている。ちょうど、この日も向かいのホテルで国際会議が開催されており、ゲート横の前庭には、フン・セン首相専用のヘリが待機していた（写真 1）。ホテル内への入館も一人ひとり X 線によるセキュリティ検査などを課す嚴重なものであった。

1) VN=ベトナム航空、TO=離陸、TD=着陸、( )内は日本時間。以下も同じ。ただし、以下はとくに言及しない限り時間はローカル・タイム。

### 2012年8月27日（世界遺産訪問：内戦による破壊と国際協力による修復）

1009 HTL 発

シエム・リアップでは稼働している信号は4つしかないという。途中貴重なそのうちの一つの三叉路を抜けて、この地点から「世界遺産地域」であることを指し示す道路わきに設置されたマークを通過する。その先、数百メートルのところに、チェック・ポイントが

地図 1 Borey Sovann Restaurant と Neary Khmer Restaurant

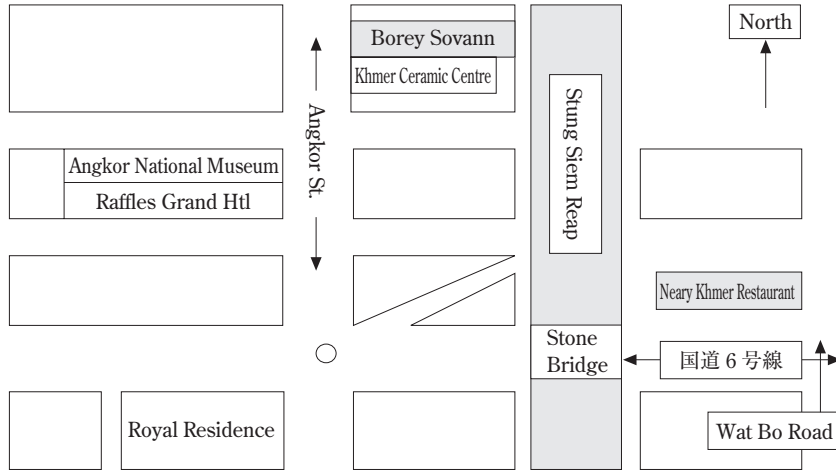


写真 1 フン・セン首相の専用機とみられるヘリコプター

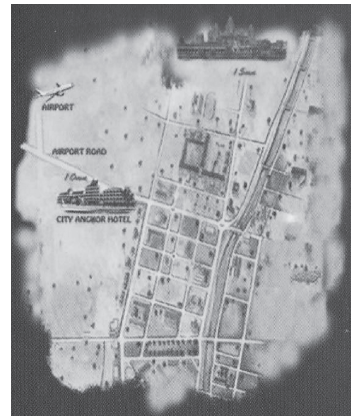


写真 2 古地図を模したデザインに City Angkor HTL の位置をあしらったホテルのパンフの一部

あった。前回（1998 年）来たときにはなかったもので、その「近代化」ぶりには驚かされた。団体バスや、乗用車が次つぎときて、ワンストップする。徒歩で個人・団体などカテゴリー別に用意されたレーンに並び、指示に従って自動カメラの前に立つ。待つこと数分で次頁のようなチケット（写真 3-1、3-2）が発行された。有効期間についてはバラエティがあるようだ。このチケットがあれば、広大なアンコール遺跡群の公開されている部分には午前 5 時半から午後 5 時半まで出入り自由となる。販売収入は、アンコール考古学パークの維持費に使用する。観光らしい観光をしなくなって久しいので、途上国でこのような近代的かつ効率的なシステムに出会うのは初めてであった。また、別の視点からは、

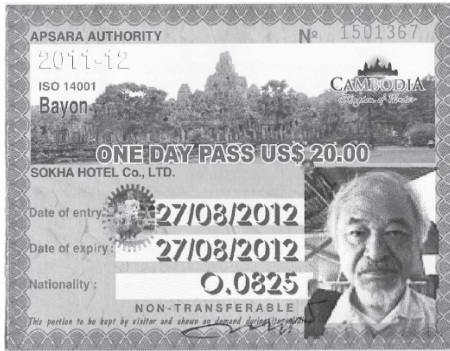


写真 3-1 一日通行証の表面

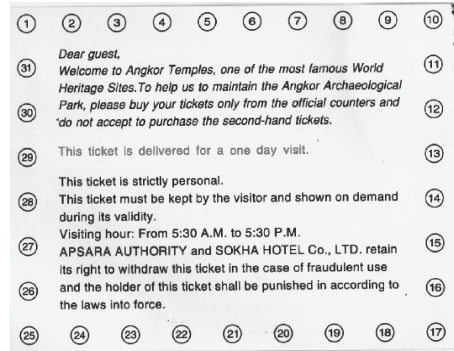


写真 3-2 一日通行証の裏面



写真 4 カンボジアの紙幣のデザインに使われているバイヨンの菩薩像



写真 5 象のテラスの東端



写真 6 遺跡に根を張った「ガジュマロ」



写真 7 このような大木を遺跡が「支えている」

カンボジアの観光資源、観光産業への取り組みの並々ならぬ意気込みが直接感じられる例でもある。

Khmer Rouge 政権下とその後の内戦期に、アンコール遺跡群は保全の対象になるどころか、多くの破壊行為にさらされた。実際、いまだに遺跡の壁に当時の弾痕が残る個所もある。観光産業がこの国の主要産業の一つである以上、その保全は産業の将来も考慮しつつ、それ相応の資源を投入しなければなるまい。遺跡群の修復・保全への協力が、平和構築の一部であることは疑いを入れない。遺跡群の修復・保全事業には、現時点で 17 か国が協力している。

日本は、JICA が ODA から支出して協力している<sup>2)</sup>。実際には、早稲田大学（中川武教授）、上智大学（石澤良昭教授）などのチームが、現場での計画策定や作業の指導にあたってきた。早稲田大学中川教授が中心となった Angkor Thom では、中心的建造物であるバイヨン寺院<sup>3)</sup>の南・北経蔵の保存修復事業や敷地の入り口と母屋との間に建てられた石造りの屏風の修復などに従事している。

午前中 Angkor Thom と Ta Prohm

Ta Prohm インド政府が修復協力の中心となっている。

1215 ～ 1300 昼食 Angkor Wat 前の観光客用レストラン

午後 Angkor Wat

1845 ～ 2030 夕食 Neary Khmer Restaurant, Slorkram Village, Siem Reap

カンボジア伝統医療機構（CaTMO：Cambodian Traditional Medicine Organization）専門家高田忠典氏ご臨席、会食、学生と懇談：カンボジアがいわゆる伝統医療の薬草の宝庫であること。各村にクルー（伝統医療の医師）<sup>4)</sup>がいること。ミャンマーへの展開を考慮していることなどが披露された<sup>5)</sup>。

2045 HTL 着

- 2) 「3. アンコール遺跡保存修復事業（ユネスコ文化遺産保存日本信託基金）(1) 事業の概要 アンコール遺跡はカンボジア和平成立直後の 1992 年、世界遺産に登録されると同時に危機遺産に登録された。各国が一斉に遺跡修復に乗り出す中、より効率的な調査・研究と修復を行うため、我が国はフランスと共同で『アンコール遺跡救済国際会議』（東京会合）を開催するなど国際的な支援の枠組み作りに貢献する一方で、『日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）』を立ち上げ、我が国による具体的な遺跡保存修復事業として、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金により 1994 年から事業を実施している。」

表 1 日本国政府アンコール遺跡救済支援一覧

	実施期間	事業費	事業内容
第一期	1994.11 ～ 1999.9 (4 年 10 か月)	約 960 万ドル	アンコール・トム中心寺院のバイヨン寺院の北経蔵の保存修復

第二期	1999.5～2005.4 (6年)	約1,100万ドル	①アンコール・トム王宮前広場プラサート・スーブラ塔の修復 ②アンコール・ワット北経蔵の修復 ③バイヨン寺院全体の包括的保存修復マスタープランの策定
第三期	2005.6～2011.7 (6年3か月)	約327万ドル	①バイヨン南経蔵修復(修復計画の策定、部分的解体、再構築) ②バイヨン内回廊バスレリーフ(劣化原因調査、保存計画の策定等) ③バイヨン中央塔(地盤調査、保存計画の策定等) ④バイヨン・インフォメーション・センターの建設

『第7回 参議院政府開発援助(O DA)調査——派遣報告書——』「第4章 ベトナム社会主義共和国、ラオス人民民主共和国、カンボジア王国班報告：Ⅳ. カンボジア王国における調査・第3 調査の概要」2011年3月、246頁から抜粋。

- 3) 日本でも、ジャヤ・バルマン7世を主人公にした三島由紀夫の戯曲『瀨王のテラス』でよく知られている。
- 4) クルーの語源は、サンスクリット語の guru (先生、教師、尊師、師匠) で、広くタイ語やマレー語にも定着している。
- 5) 日本財団(カンボジア伝統医療機構の資金ドナー)が大きくミャンマーに舵を切ったことと無関係ではないと推測される。アジア各国で配置薬の導入の動きが広がるのに応じて、09年にはタイとミャンマーの保健省が配置薬政策を採用、12年からはモンゴル政府も導入する予定である。日本財団(笹川陽平会長)は、この動きを支援し、地方の家庭向けを主体に、薬箱には日本製より安価な現地薬が入っているセット配布を支援した。2012年02月08日『日本経済新聞』地方経済面、北陸版8頁、「タイで配置薬、企業向けに、広貫堂、年内にも、薬局開設へ」参照。さらに、2011年12月14日、笹川会長訪緬時に、イン・セイン大統領と首都ネピドーの大統領官邸で会談し、同大統領から「中国や韓国と比べてミャンマーへの投資に慎重な日本企業に対し、進出が遅れないよう」求められている。2011年12月15日『日本経済新聞』朝刊7頁、「ミャンマー、日本企業進出要請」参照。こうした経緯から、2012年には、日本財団が本格的にミャンマー支援に乗り出すことが予測されていたが、10月18日、少数民族地域への300万ドルの緊急支援が発表された。2012年10月19日『読売新聞』朝刊外B6頁、「日本財団 ミャンマー和平後押し 少数民族地域に2億円超支援」参照。「支援品は、長年の内戦による国内避難民向けで、コメなどの食糧と医薬品となる予定。第1弾として、今年12月をめどに30万ドル相当の配布を目指している。」

## 2012年8月28日(バタンバンへ移動：除隊兵士へのインタビュー)

0752 HTL 発

0943 GS トイレ休憩～0952

1109 HTL 着

Khemera Battambang 1 HTL へチェックイン

Bdg. #611, Street 515, Chrey Kourng Village, Sankat Slaket, Battambang City, Battambang Province.

昼食前に市場見学(写真8、9)

1159～1303 昼食 102E8. 20 Usaphea Village, Group 8, Svay Por Commune の White Rose とされる。



写真 8 鶏肉



写真 9 カボチャの語源はポルトガル語の Cambodia、唐茄子は中国由来、ただし原産地はアメリカ。

1320 HTL 着 休憩

1430 集合

除隊兵士の支援をしている NGO Terra Renaissance の Kun Chhay 氏からホテル・ロビーにてブリーフィング。Kun Chhay 氏のブリーフィングはもっぱら障害を負った除隊兵士への支援について行われた。帰国後アクセスした Terra Renaissance の HP 掲載<sup>6)</sup>の資料と Kun Chhay 氏のお話とを総合すると、現下での Terra Renaissance のカンボジアでの地雷関連の活動は以下のようなになる。外部から簡見する限り Interband のそれまでの仕事を引き継いだように思われる。この点の年表も参照されたい。

2001 年 10 月 特定非営利活動法人テラ・ルネッサンスは、「すべての生命が安心して生活できる社会（世界平和）の実現」を目的に設立された。

2001～2003 年 150 家族を支援 3 州

2005 年 日本から支援が入る<sup>7)</sup>。

2011 年 日本は一部 Mandate 終了

2006 年～現在も Battambang で支援継続

表 2 カンボジア地雷埋設地域村落開発支援プロジェクト<sup>8)</sup>

対象地域	カンボジア王国バットアンバン州地雷埋設地域
対象	2006 年～継続中
実施期間	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. バナン郡                      チャンミエンチャイ区チャンホースヴァイ村貧困層家族                      (2006 年 10 月～2008 年終了)                      チャンミエンチャイ区ドーン村貧困層家族                      (2006 年 10 月～2008 年終了)</li> <li>2. カムリエン郡                      トラン区オッチョンボック村貧困層 100 家族</li> </ol>

	(2008年10月～継続中) バン・ルン区プレア・プット村貧困層 80 家族 (2009年10月～継続中) カムリエン区ロカブス村貧困層 100 家族 (2011年1月～継続中)
プロジェクトの目標	地雷埋設地域の貧困削減し、地雷被害者や、元子ども兵、小型武器の被害者を含む戦争被害者が、自立して生活できるようにサポートをするとともに、新たな地雷&不発弾事故を防止する。

HPに記載された内容から理解されるのは、このプロジェクトが実に体系的に展開されていることである。地雷埋設地域の状況把握から問題と原因を抽出し、その解決のための活動を設定し、到達目標を定めている。ウェブ・サイトでは、わかりやすい図になっているが、あえて表に移し替えると以下のようなになる。

表3 テラ・ルネッサンスの地雷問題への取り組み<sup>9)</sup>

地雷埋設地域の状況		活動	目標
問題	原因		
新たな地雷事故の危険性	高利貸からの借金 地雷原での生活 農地・仕事がない 危険を知りつつ、生きるために危険を冒す	地雷撤去活動支援プロジェクト	地雷事故ゼロ
		地雷埋設地域村落開発プロジェクト	地雷被害者の生活再建
厳しい地雷被害者の生活	心身に残る障害 社会保障制度の未整備 地雷が農地を汚染 元子ども兵の経験を持つ人もいる	収入向上支援活動 社会保障制度支援活動 基礎教育支援活動	地雷埋設地域の持続的発展

このうち、Kun Chhay 氏のブリーフィングは、時間の関係もあり、地雷埋設地域村落開発プロジェクト、地雷被害者をはじめとする障害者などの社会的弱者およびその家庭への支援に焦点をあてたものであった。弱者への支援が、Water sanitation を含んだり、基礎教育支援が、具体的には学校建設、図書館の充実、文房具の供給であることが示され、また、開発では、農業支援の文脈で職業訓練とも連携する家具生産にも及んでいることは傾聴に値するものであった。

HTL から 30 分程度のところで 3、4 家族を訪ね、時間があれば Phnom Sompoo (カボチャ丘) に寄ることにして出発。

1445 HTL 発

表4 除隊兵士インタビュー一覧<sup>10)</sup>

名前	場所	年齢	カテゴリー	軍歴	インタビュー時間
----	----	----	-------	----	----------



1	A 氏	Svayprakeap	45	I	16 歳（1983 年と推定） で入隊 2001 年に除隊	1512 ～ 1600
2	B 氏	Kampong village	50～51	I	1982 年に入隊 2000 年 頃動員解除で除隊	1612 ～ 1700
3	C 氏	Kan Teu I village	54	III	32 歳（1980 年と推定） で入隊 41 歳（1999 年 と推定）で除隊	1715 ～ 1750

表 5 負傷除隊兵士のカテゴリー一覧

カテゴリー	負傷の有無	自活の是非
I	重症で自身では生活できない	自分では生活できない
II	負傷のため仕事ができない	何とか自活できる
III	負傷したが仕事はできる	
IV	負傷していないが仕事がない	

Kun Chhay 氏の説明から作成。

Kun Chhay 氏、山田満教授がともに活動した Interband では、2000 年 12 月から除隊兵士家族支援プロジェクトを開始したが、その当初の分類は、以下のとおりであったようである。

表 6 インターバンドによる初期のカテゴリー

カテゴリー1	カテゴリー2
健康な元兵士で再統合プログラム*を利用して、自立している者。	銃撃や地雷によって肉体的なハンディキャップを負った元兵士も数多くおり、経済的・社会的に自立する事が極めて難しい状況で生活している者。

\* DDR の R にあたる。

「カテゴリー2」に属する社会復帰が困難な元兵士も健康状態、社会・経済状況などさまざまであり「個々の状況に合わせて」支援する役割、つまりソーシャル・セイフティー・ネットの構築は、政府には困難であり、NGO によるきめの細かい支援が期待されている<sup>11)</sup>。

1 A 氏 45 歳。もともと現在地から 200 m ほど道路よりの土地から移動したばかり。

以前は、タイヤのパンク修理と豚、鶏の飼育で食べていた。もともと貧乏であったが、いろいろ Chhay 氏の金銭的支援や助言で徐々に儲かりだした。その支援期間は 6 ヶ月であった。二人とも何年何月から何月までだったかはもう正確には覚えていない。支援終了後、妻と離婚。平たく言えば、もともと住んでいた土地を売って、財産を持って妻が他の男のもとに逃げた。二人の子どもは、妻が育てている。今の土地は、村から借りている。仕事はあまり儲かっていないようだ。インタビュー時に周辺にいたお年寄りや子どもは、

親戚や近所の人びと。

Interband がなぜ support したか。1990 年ごろ戦場で爆弾の破片や鉄砲の銃弾で足に怪我。そのために support が決まった。今でも右手の二の腕だけが異常に発汗していたり、感覚がなかったりすることがある。もっとも大きな傷跡は尻の近くなので恥ずかしくて見せられない。問題は、自分の足だが自分の足ではないという感覚。何かが足の中にいまだにあるという感覚。79 という名前の弾の破片があり、尻に近い脚の部分のみでなく腕等、体中に破片が残っている。

[Kun Chhay 氏の説明：2004 年～2005 年に support を受け、その後 monitoring をしているが、2 年程度ここに一人で住んでいる。戦争が終わって軍は多くの兵士が不要になった。そこで多くの兵士を除隊させた。怪我の程度によって、4 つのカテゴリーに分けている。怪我をした人、怪我をしたけれど仕事ができる人できない人、怪我はないが仕事がない人、自活できる人できない人。彼の場合は、怪我をしていて仕事ができないカテゴリーと判断され support が決まった。]

Q 今も病院に行っているのか。

A 行っていない。風邪などはたまにひくが、薬屋に行って自分で治す。

Q 援助に何か不満 (complaint : ママ) はあるか。

A ない。happy で NGO を appreciate したい。

Q 薬代は、年間いくらかかるか。自分のお金か。

A 自分のお金だ。約 20 万～30 万リエル。70～100 \$ くらい。

Q 都市部などもっと人が多い地域で仕事がしたいか。

A 活動したい気持ちはあるが、土地の借地料が高い。この仕事ではそのような金は稼げない。

Q 今後どのような支援を期待するか。

A わからない。

Q 軍にいるときはどのような仕事をしていたか。

A 一番下の兵だから戦場に行くしかない。

Q 軍にいたときと、今の収入の違いは。

A 軍では、給料ではなく、政府がお米をくれる。今は、月に 10 万リエル、約 25 \$ 支給されている。

Q (質問聞きとれず)

A そういう場合は国からのお金が入る。

Q 軍にいたときと今とどちらが生活はしやすいか。

A 戦場に行かないから今のほうがよい。軍のときは、家族と一緒にではなかった。毎日が戦場で移動。毎日家族が心配だった。



写真 10 A 氏



写真 11 B 夫人の「移動店舗」

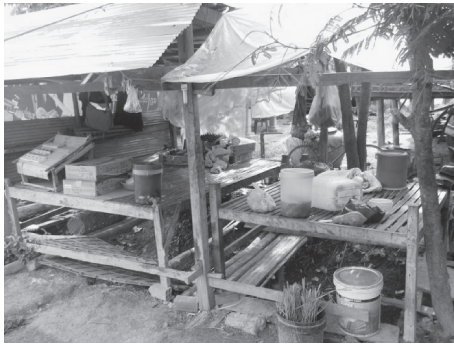
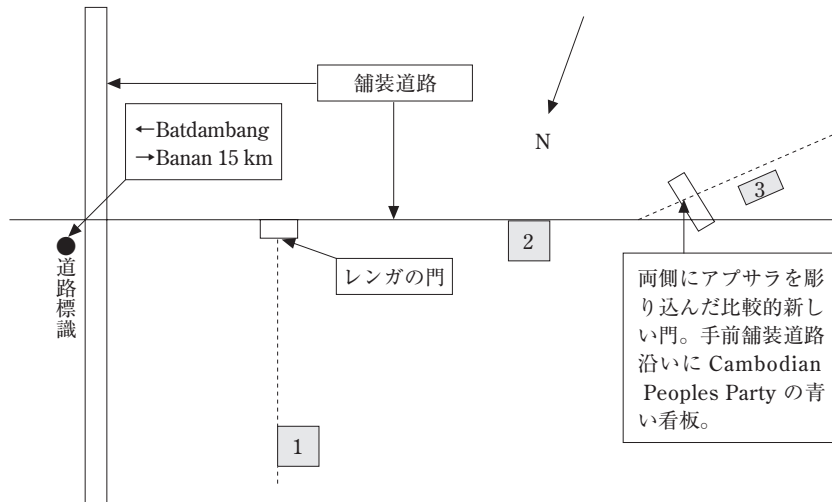


写真 12 B 氏の道路に面した小店舗



写真 13 C 氏とその家

地図 2 インタビューした除隊兵士の自宅略図  
(道は一本道であるが直線ではない)



Q 戦争とか紛争とかについてどう思う。

A わからないが、戦争では命令されるとおりにどこにでも行かなければならない。軍に入ったのは16歳だった。16歳で入隊して2001年に除隊した。子どもは二人で、上の息子は19歳、バタンバン周辺の学校に行っている。高1だ。友人のバイクに乗せてもらって一緒に通学している。月に5,000～8,000リエルをガソリン代として払っている。下の子は中1でやめた。家族の生活の問題でやめた。自分も子どもの頃には学校に行っていた。軍に入る前。何も勉強できなかった。内戦中で、あちこち逃げたりして学校に行けなかった。今、国から月10万里エル支給されている。勉強をさせてくれるという人がいたが、忙しくて機会を逃した。

Q NGOや外国に何を期待しているか。

A わからない。エンジンなど勉強したいが、目も悪くてできない。勉強とは何か、将来何が生かされるのかカンボジアの人びとはみな迷っている。

Q 軍隊にいたとき最低何歳の同僚がいたか。

A それは決まっていないので強制的に行かされる。

[通訳説明] 実際に、13、14、15歳でも背が高くなると軍に行かされた。学校を軍が囲んで、強制入隊させに来ることもあった。また、村長や、ポリスはリストを持っていた。

2 B氏 50～51歳、本人にも正確な年齢はわからない。

[Kun Chhay氏の説明：ここの夫婦は、実によくビジネスとは何かを理解している。とくに夫人のほうは、自転車を使って「移動店舗」(写真11)を「経営」している。もともとは、この土地よりももっと奥まったところに居を構えていたが、自力でこの土地を買い求めて、転居してきた。]

家族は、子ども4人と妻。長男21歳、5ヶ月前に結婚したばかりで、同じ敷地の隣家に住む。長女18歳、プノンペンにいる。次女15歳、三女11歳。二人はここで勉強している。一番下は、もともと双子で、片方がなくなった。生き残ったほうもよく病気をする。今日も点滴を終えてきたばかりだ。月に薬代だけで20～30\$支払うこともある。

夫人が、市場で野菜を仕入れてきて、自転車のケースに載せて、村の遠いところまで売りに行く。本人は、牛の焼肉(おつまみ)、漢方薬を、道路に面した店(写真12)で売る。一日やって一日食べていくだけの収入しかない。田畑はない。

当初支援でもらったお金で鶏を飼っていた。2年間続けたが、あるとき、鶏の病気ですっかりなくなってしまった。そこで妻と二人で考えてこの小さな店を構えた。支援では、魚網も買って、魚を捕った。空心菜や白菜も作った。引越し前は、村の場所を借りていた。現在のところは買った。

軍歴は、1982年に入隊、18～19歳だった。何十回も戦闘に行った。1992年だったか

1993 年だったかに右足に M16 の弾丸を受けた（右ひざを中心にいくつもの負傷痕）。マシンガンなので 10 発近く当たった。ここから 90 ～ 100 km の近い戦場だった。軍のトラックで運ばれ近くの病院に入った。県の病院なので何もなかった。そこで救急車で州の病院に移動した。42 日間で治った。怪我を治した後、軍に復帰したが、戦場には行かずに司令部付の事務等をやった。2000 年頃に動員解除で除隊した。国から、月 10 万リエル支給されている。死ぬまでもらえる予定である。死んだら子どもに支給用のチケットを渡す。もらい方は、自由で、年に 1 回にまとめても良い、2ヶ月に 1 回でも良い。近くの（約 2 km）警察署でもらう。

Q 国の支援には満足しているか。

A もらった支援で商売ができるし、家族にお金が入るし、とてもよい。もしその支援が間に合わなかったら、三女はとうの昔になくなっていただろう。鶏、網代と薬代と Kun Chhay の NGO からそれぞれ違う資金でもらっている。

Q プノンペンにいる長女の学費はどうしているか。

A プノンペンでは、学校ではなく、携帯を売る会社で働いている。

Q 仕送りはしているのか。

A 1ヶ月前に行っただけなのでまだ様子がわからない。高校 1 年でこちらの学校をやめてプノンペンに行った。

Q あなたの移動手段は。

A バイクは OK、車はできない。もともとバイクは持っていた。除隊時に軍からもらったものだ。牛も何頭かいたが、長男の結婚で売ってしまった。妊娠していた牛のみ 1 頭残したが、2ヶ月前に、仔牛が大きくなりすぎて出産時に死んでしまった。

Q 夫人が野菜を売りに行くときにはどのくらい遠くまで行くのか。

A 約 2 ～ 3 km。この近くの市場で買ってきて村で売る。薬屋（薬酒のようである）は子どもの商売。これは本当に健康に良いので、みなが買いにくるように私も少し飲んでい。これが子どもへの手助け。お金が足りないときには周辺の人から借りたりする。

Q どのような支援を望んでいるか。

A 今ちょうどお金がないところだから、欲しい。土地が 9 m × 30 ～ 40 m、柵を作って鶏や豚を飼いたい。子どもたちも出入りするので危険だから、家の前の溝をコンクリートのチューブ管を 9 m 埋設したい。

Q 鶏、豚などには、どのくらいの資金が必要か。

A 豚の子どもはオス・メスにかかわらず 1 頭 25 万リエル。鶏は重さで売るので 1 羽約 2 kg として、1 羽 10 ～ 15 \$。問題は、飼育する建物。雨にぬれては死んでしまうので建物が必要。えさは残飯で十分。

Q 長女にはどういう気持ちでいるか。

A 本当は親の気持ちでは、学校をやめさせたくなかったが、彼女が自分で家のことを考えてやめてブノンペンで働いている。

3 C氏 女性。54歳で現在は独身。軍隊のコックをやっていた。夫婦で兵士。子どもは7人、3人女性、4人男性。長女はすでに30数歳になっていてすでに結婚済。現在は、下の二人（娘1、息子1）のみ未婚で一緒に暮らしている。その他はみなほかの場所で暮らしている。

現在の仕事は、村人の仕事を手伝ってお金をもらう。仕事が毎日あるわけではない。月に10日間～22日間。毎日ある月もあることはある。1日15,000リエルが相場。働く場所は、遠いところ近いところさまざまである。遠い場合は一人で行って、子どもが食事を勝手に作って学校にも行く。時には、1ヶ月、2ヶ月ということもある。長く行く場合には、村人に子どもを預ける。村人が多数で行く場合は、先に帰る人に子どもへの送金を託す。

学校は、ここから3km少しのところ、娘は15歳で小学校5年、息子は11歳で小学校2年。遠くに行く場合一緒に連れて行くこともあるので子供の進級が遅れるのは仕方がない。42歳くらいから独身でいる。再婚も考えたが子どもが心配でしなかった。

学校に行く以外に子どもが家事や仕事を助けてくれないと暮らしていけない。現在の家（築2年；写真13）は、結婚した子どもたちがお金を少しずつ出してきて、土台、柱、屋根、壁と少しずつ1年以上かけて建てた。5万パーツくらいかかった。

国からの支給はない。夫の分もない。除隊時に、240\$とバイクを1台支給されただけである。夫がなくなったときに一番下の子が1ヶ月で、生まれるときにバイクを売った。

Q なぜ除隊したのか。

A 軍はあちこち移動する。子どもが学校に行けない。夫がなくなってから自分もやめた。

Q 出産とか家を建てるなどの「トラブル」（ママ）のときには村の人に助けてもらうのか。

A 借りてくることもある。

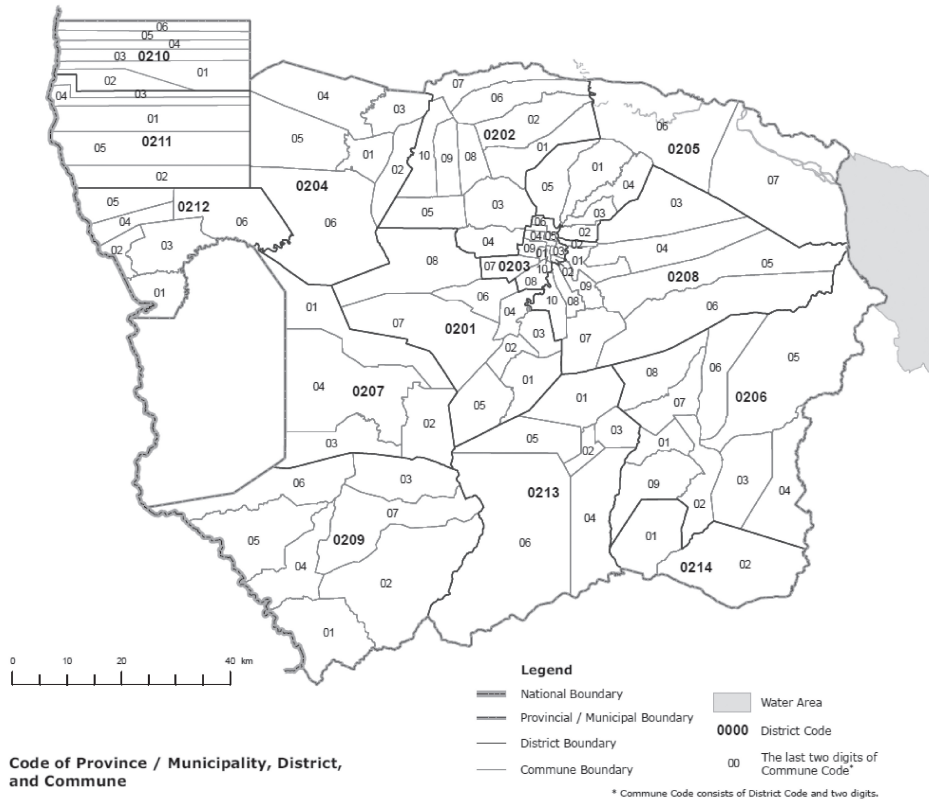
Q 鶏は放し飼いで隣家との境界もはっきりしないが、盗まれたり、犬にかまれたりとかしないのか。

A 慣れているから大丈夫。

Q ここに来る前は。

A もともとは寺にすんでいたが、Kun ChhayのNGOの支援で鶏、アヒルなどを飼育していた。病気でみな死んでしまった。そこで今の場所に家をたててもらった。軍を辞めたときにももらったお金から100\$で買った場所である。子どものためには、現在、日本人のS. N.氏が子どもたちの里親になってくれている。Kun ChhayさんのNGOが娘のひとり

地図 3 Administrative Areas in *Battambang* Province by District and Commune  
 (http://www.stat.go.jp/info/meetings/cambodia/pdf/02com\_m2.pdf <20120906 アクセス>)



● **02 BATTAMBANG**

- 0201 Banan
- 020101 Kantueu Muoy
- 020102 Kantueu Pir
- 020103 Bay Damram
- 020104 Chheu Teal
- 020105 Chaeng Mean Chey
- 020106 Phnum Sampov
- 020107 Snoeng
- 020108 Ta Kream

に裁縫学校に行かせてくれた。

Q 軍歴は。

A 32歳で入隊、41歳で除隊。夫がなくなったのが40歳頃。

Q 軍に入る女性と、入らない女性とでは、どこがどう違うのだろうか。

A ルールはない。家が貧乏で丁度軍が食事を作る人を募集していたので入隊した。

Q 具体的にはこの土地を誰から買ったか。

A 道の向こう側の同じ村の住人から。

Q 軍で一番若い女性はいくつくらいであったか。

A 最低20歳くらい。自分の担当は食堂だが、武器等を運ぶ仕事などもやった。

Q 年金にはルールがあるのか。

A 男の子は強制、女の子は意志による。(兵役と勘違い?)

1900～2000 夕食 Kun Chhay氏とともに、名前のどこかに「宝」の文字の入ったレストラン。ゲイト付近にやや怪しげな女性が複数、客待ち。

HTLに戻ると、明日訪問予定のJMASのD氏などと偶然出くわす。

- 6) <http://www.terra-r.jp/contents/index.php?itemid=213&catid=15> (20120906 アクセス) このサイトは、CMVIS (the Cambodian Mine and Explosive Remnants of War Victim Information System) のレポートに基づく地雷関連のデータが、充実している。
- 7) Terra Renaissance のHPの年表によれば、以下のとおりである。 <http://www.terra-r.jp/contents/index.php?blogid=2&catid=3> (20120906 アクセス)
  - 2001年 ・ 鬼丸昌也理事長が、大学在学中の2001年に、カンボジアを訪れ、地雷問題に触れ、「まずは伝えること」からと、講演活動を始め、「テラ・ルネッサンス (任意団体)」を設立。地雷除去資金供与、国内での地雷問題の啓発活動に取り組む。
  - 2004年 ・ カンボジアで義肢装具士育成のための奨学金給付事業を開始 (2009年終了)。
  - 2005年 ・ NPO 法人格を取得。
    - ・ カンボジアで除隊兵士の生活再建事業を開始 (NPO 法人インターバンドとの協働事業、2006年終了)。
    - 〈Kun Chhay 氏の「日本から支援が入る」は、上のことを指すと推測される。〉
    - ・ カンボジアのバタンバン市へスタッフを派遣 (～2005年8月)。
  - 2006年 ・ カンボジアのバタンバン市にカンボジア事務所を開設。
  - 2008年 ・ カンボジアにて、小学校建設事業及び地雷埋設地域村落開発支援プロジェクトを開始。
  - 2010年 ・ カンボジアにて、地雷回避教育プロジェクト及び地雷埋設地域伝統音楽復興&継承プロジェクトを開始。
  - 2011年 ・ カンボジアにて、外務省「日本 NGO 連携無償資金協力」により地雷埋設地域小学校建設プロジェクトを開始。
- 8) <http://www.terra-r.jp/contents/index.php?itemid=177&catid=15> (20120906 アクセス)
- 9) <http://www.terra-r.jp/contents/index.php?itemid=177&catid=15> (20120906 アクセス) 「テラ・ルネッサンスの地雷問題への取り組み」から作成。オリジナルの図を表に展開したのは、本稿はカラー印刷ができない決まりのためで、他意はない。
- 10) インタビューにあたった村の名前の同定は困難を極めた。そもそもクメール語の音に慣れないた



めに聴き取れず、スペルを訊いても人によって異なり、帰国後ノートのメモをもとに各種文献や Google earth も駆使してみたが、正しい位置と正しい名称には至らなかった。ここで示したのは、村人たちによる自称（俗称）である可能性も高い。あるいは村よりも小さな集落名である可能性もある。ちなみに、カンボジアの行政区画とタイの行政区画を参考までに示す。

表 7 カンボジア国内行政区分

クメール語	khaet	srūk	khum sangkat	phum
英語訳	province	district	commune quarter	village
日本語訳	州または県	県または郡	区または地区	村
数	23	Battambang の場合 13	Banan の場合 8 khum	Banan の場合 76
備考	プノンペン特別市 (krong, municipality)		khan, section	Sangkat, quarter
タイ語	jangwat	878 districts amphoe kinamphoe	tambon (subdistricts)	muban (villages).
日本語訳	県 (76)	郡 (798) 分郡 (80)		村
備考	Bangkok, a special administrative area	15 khet, district	khwaeng.	

最初の Svayprakeap 村は、Chheu Teal Khum に Svay Prakeab 村という地名が行政リストにあるのでおそらくこれで間違いなからう。第 2 番目の Kampong village は、当初から期待していなかった。Kampong は、そもそもマレー語で単に村を意味することを知っていたからである。カンボジア語にも定着しており、Kampong Som、Kampong Cham、Kampong Thom などがかすく頭に浮かぶ。Kampong の後ろに何かつかないと意味をなさない。事実、Banan srok には 10 か村近くの Kampong で始まる村がある。3 番目の Kan Teu I village については、推測だが、Kantueu Muoy という Khum がある。Muoy は、カンボジア語で「1」を意味する。したがって、これは、「i」という英語ではなく、数字の「1」を表現したかったのではなからうか。であるとしても村名ではなく、その上の行政単位「区」である。

大まかな位置については、「総務省統計研修所は、総務省統計局等とともに、国際協力機構 (JICA) を通じてカンボジア計画省統計局に対して、2005 年 8 月から 2010 年 9 月まで技術協力を実施している (<http://www.stat.go.jp/info/meetings/cambodia/nittei.htm> 参照)。この技術協力を通じて、カンボジア計画省統計局から 1998 年カンボジア人口センサス個別データの使用許可を得て、新たな小地域統計を集計した。」<http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/hajimeni.pdf> (20120906 アクセス) ここにバタンバン州の行政区画図があるので地図 3 に示す。図中、もっとも密集しているのがバタンバン市でバナナ県は、code 0201 である。

上の推測が正しいなら、われわれは、code 020104 → 020102 or 020103 → 020101 と進んだ可能性が強く、第 2 番目が 020104 Chheu Teal Khum 内にあるならば、Kampong Chamlang, Kampong Srama のいずれかで、020102 Kantueu Pir khum 内にあるならば、Kampang Lech, Kampang Kaet のいずれかで、020103 Bay Damram khum 内にあるならば、Kampong Chaeng であり、020101 Kantueu Muoy khum 内にあるならば、Kampong Ampil である可能性が高い。

- 11) 油、塩、蚊帳、毛布、ハンカチなどが支給される。第二次支給として、家、家修理、モーターバイク、水ポンプ、発電機を支援する住宅支援と、牝牛、雄牛、水ポンプとリアカーミシンと自転車、自転車とモーターバイク/自転車修理部品の 2 種類のパッケージを用意する。バイクや現金 240 \$ に言及した者はいたが、その他についてはほとんど本人たちからの言及がなかったのは不思議である。以上、<http://www.interband.org/cambodia/ddr.html> (20120825 アクセス) から引用。

## 2012年8月29日（地雷処理活動現場とクメール・ルージュ時代の虐殺現場）

0803 HTL 発

0815 JMAS workshop 着

修理部門見学とブリーフィング

リモコンでの実地操作見学

2003年に最初の車ができた。それ以来改良した最大のポイントは、回転部の両脇と軸の間に草が絡まったりするのでそれを防止する設計にした点だろう。ラジコンは最大100m。運転席は1名しか乗れないがエアークンが効いているので、みなラジコンよりも直接操作を好む。人手だと10～20m<sup>2</sup>/hour、機械だと400～500m<sup>2</sup>/hour。土壌の硬さの差が問題。除去車の重量が重いので時として対人地雷などの爆発力の弱いもの（TNT 50g強）は、運転席で操作している者は気付かないこともある。（E氏談）<sup>12)</sup>

E氏（コマツ建機マーケティング本部海外営業本部地雷撤去プロジェクト室長）Briefing

本事業はコマツのCSRであるが、途上国の発展につれて、海外シェアが低下していったのと無関係ではないという指摘が印象に残った。

0930 JMAS workshop 発

1020 チサン村 撤去現場宿営地着

撤去現場宿営地でのFカンボジアJMAS代表Briefing

F代表：2012年4月に現職に就任。2002年陸上自衛隊第9師団<sup>13)</sup>で対人地雷を使わない防衛戦略の研究。JMASは、技術的、制度的、財政的にC-MACを支援。C-MACの予算の95%はドナーからである。JMASは、外務省の援助費から支出。F代表は25枚に及ぶカラースライドをご用意くださったがここではもっぱら紙幅とモノクロ印刷の関係から、非礼を省みず、図表以外は、文字部分のみ抜き取りないしは再打ちこみとする。

### ■内容（区分）

- ・JMAS
- ・カンボジア地雷・不発弾の状況
- ・カンボジアにおけるJMASの活動枠組み等
- ・地雷処理活動
- ・不発弾処理活動
- ・今後の課題

地図4 JMAS 作成の見学当日用地図 (実物は A4 判カラー印刷)

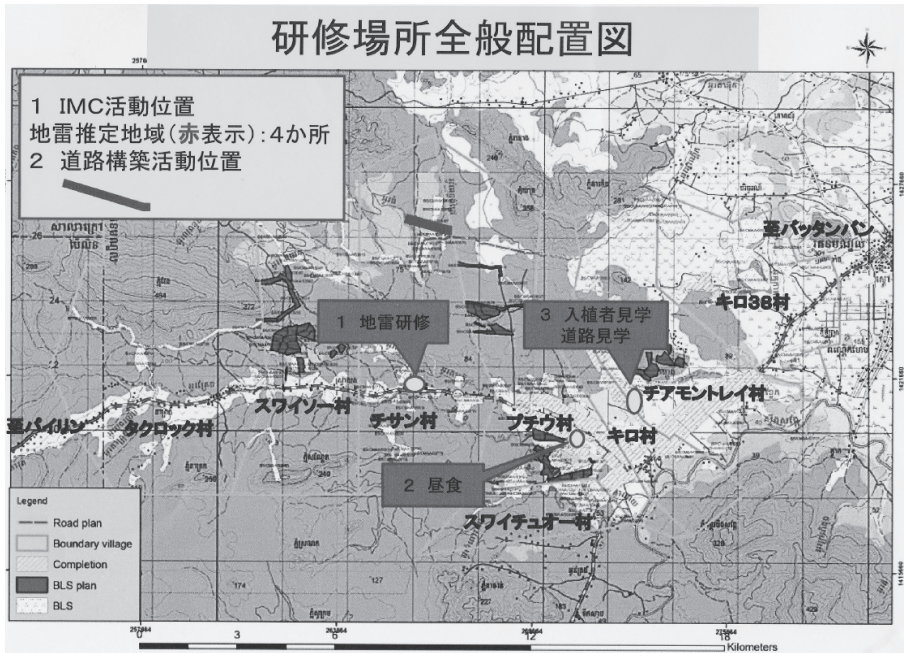


写真 14 地雷処理車側面から  
右が前



写真 15 背面から

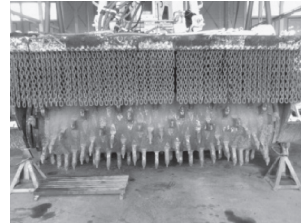


写真 16 正面前から

■ JMAS (日本地雷処理を支援する会)

○設立・認定

- ・元自衛官が中心
- ・2001年、任意団体として設立
- ・2002年、認定特定非営利法人〈東京都で認定〉

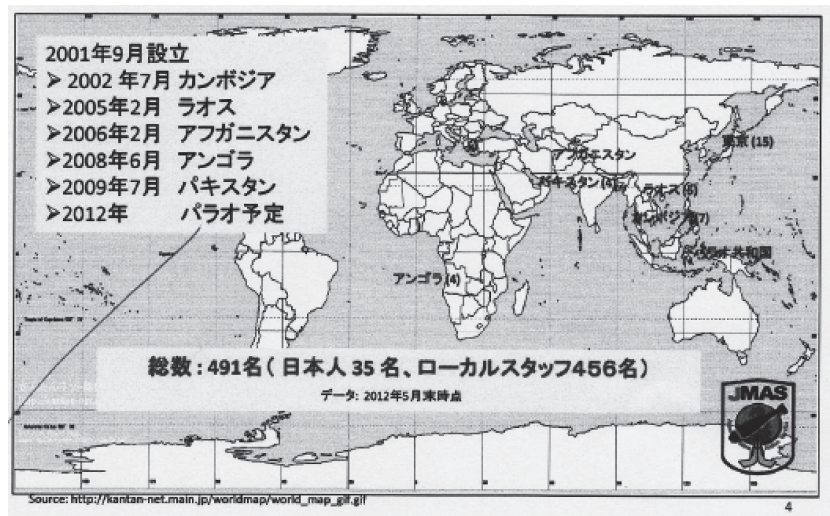
○主要活動

- ・地雷・不発弾の処理及び技術移転
- ・地雷・不発弾の危険回避教育
- ・地域開発 (インフラ建設)

## カバータイトル頁



## JMAS の事業展開



〈パラオは、南鳥島の関係で島であることを支持している国への援助。〉

### ■カンボジアの地雷・不発弾

- ▶地雷：400～500 万個
- ▶不発弾：240 万個以上
- ▶被害者数：63,800 名（1979 年～2010 年）
- ▶汚染面積：4,544 km<sup>2</sup>（カンボジア全体の 2.5%）
- ▶汚染された村：6,422 村（全体の 46%）
- ▶危険な環境の人口：519 万名（全体の 45.3%）

出展：CMAC “Five-Year Strategic Plan 2010-2014”

1992 年から 2012 年 1 月までの結果：

- ▶処理面積：784 km<sup>2</sup>（全体の 5.8%）
- ▶地雷処理：95 万個（対人地雷 930,826 / 対戦車地雷 21,582）
- ▶不発弾処理（EOD）：210 万発

出展：CMAA as of Jan. 2012

### ■JMAS の活動枠組み

- 外務省（NGO 連携無償資金）、個人、企業からの資金・協定
- CMAC への資金提供、協定、共同作業
- 地雷処理やインフラ建設に関しては、村、コミューンから州レベルまでの行政当局と調整、必要に応じ覚書

2009 年から JMAS-CMAC の協同

器財の基本的操作にあたるオペレーターは現地の人

基本的には 1ヶ月トレーニング。半年で大体使えるようになるが向き不向きがある。

給料は一般の仕事よりも高いので人気がある。作業の終了した北のタサエンから異動者を募ったところ 1 名を除いて全員が応募してきた。月に一度帰れるか否かなのに多くが希望して今月中にくる。今度は女性も多く含まれるので宿营地などその対応が必要。女性と男性とでは、この仕事は神経を使いながら炎天下で来る日もくる日も同じことを繰り返すので、女性だと体力がもたないケースがある。

- 2011 年度の活動概要

IMC（Improvement Mine Clearance in Battambang）プロジェクト  
（地雷処理）

▶期間：2011 年 9 月～2012 年 9 月

▶資金：総合計 1,343,037 米ドル

▶地域：トラエン・コミューン、タサエン・コミューン（バタンバン州）

EOD プロジェクト

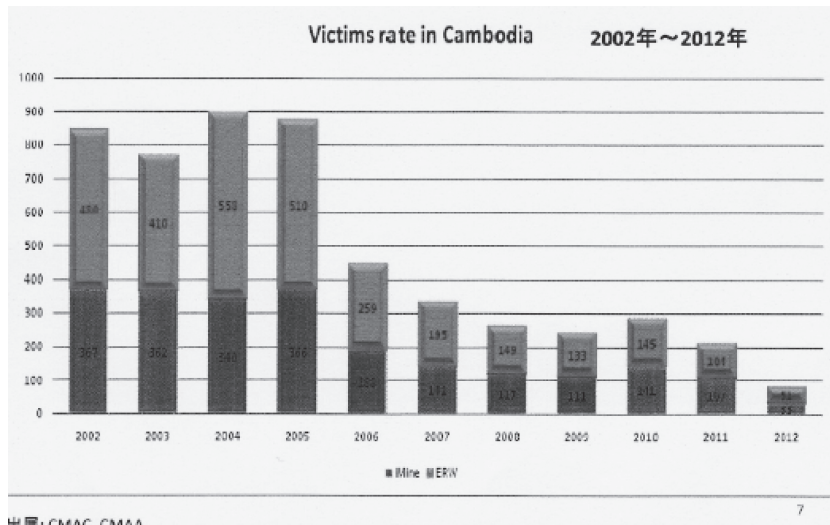
（不発弾処理）

カンボジアは世界で最も地雷／不発弾が多い国

地雷・不発弾の事故



地雷・不発弾の被害者



## 活動体制 (2012 年現在)



▶期間：2011 年 10 月～2012 年 10 月

▶資金：総合計 848,991 米ドル

▶地域：シェムリアップ、コンボントム、タケオ、カンボート (各州)  
インフラ建設プロジェクト

▶期間：2011 年 9 月～2012 年 8 月

▶資金：小松製作所

▶地域：トラエン・コミュニケーション

■地雷処理活動

○バタンバン州の地雷原特性

▶地雷原：846 個所、7,568.5 ha (カンボジア国内の 16.7%)

▶2002 年～2012 年までの地雷被害者数：714 名

▶カンボジア国内でも地雷被害者数が最も多い地域

出展：CMAA、CMAC (As of May 2012)

○地雷処理成果 (2006 年 5 月～2012 年 3 月)

- ・地雷原除去地域：466.04 ha
- ・対人地雷 3,130 個
- ・対戦車地雷 49 個
- ・不発弾 1,449 発
- ・破片 11,773,916 個

## ○住民参加型プロジェクトについて

- ・目的：地域の自立促進と生活環境の改善
- ・狙い：雇用創出、処理跡地利用による農業振興と企業誘致、生活環境改善、女性の地位向上
- ・地域の選定：貧困で生活環境の厳しい村

## ○実施要領

- ・コミュニン内から地雷除去員募集（性差別なし→女性多数）、訓練
- ・NGO 資金で地雷処理、企業・個人の資金でインフラ整備
- ・NGO 間の協力
- ・企業誘致（現在日本企業 3 社）
- ・地雷処理地、処理跡地利用、インフラ整備に係るコミュニン等行政サイドとの調整

注：対戦車地雷による 7 名の隊員死亡事故

## ○SVC プロジェクト（安全な村づくりプロジェクト）

基本的考え：地雷処理は手段、社会的・経済的価値を付加して完結

## ▶資金・機材

小松製作所

外務省（日本 NGP 連携無償資金協力）

## ▶地雷処理：機械処理

- a) デイマイニングマシーン（コマツ）
- b) ブラッシュカッター（山梨県日立建機）

## ▶地雷処理後：安全な村づくり

- a) 入植地：500 世帯（世帯 20 m × 50 m）
- b) 学校建設：3 校
- c) 道路建設：12 km
- d) カルバート（暗渠）：19
- e) ため池、井戸：33

2008 年 ラタナックモンドル郡区スダウ・コミュニン リャースメイサンハー村

2009 年 同トラエン・コミュニン キロ村、チアモントレイ村

2011 年 同 チサン村

2012 年 同 プチュウ村

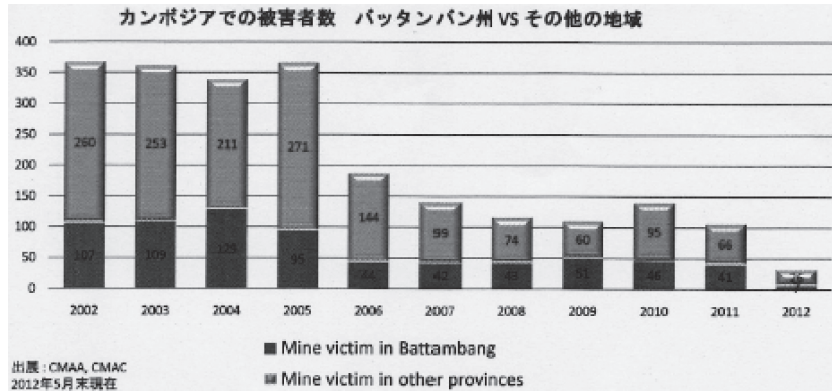
Rotonak Mondol, Sdau, Sanhaa, Traeng, Kilou, Chea Montrei, Chi Saang, Phcheav

## ■不発弾処理活動

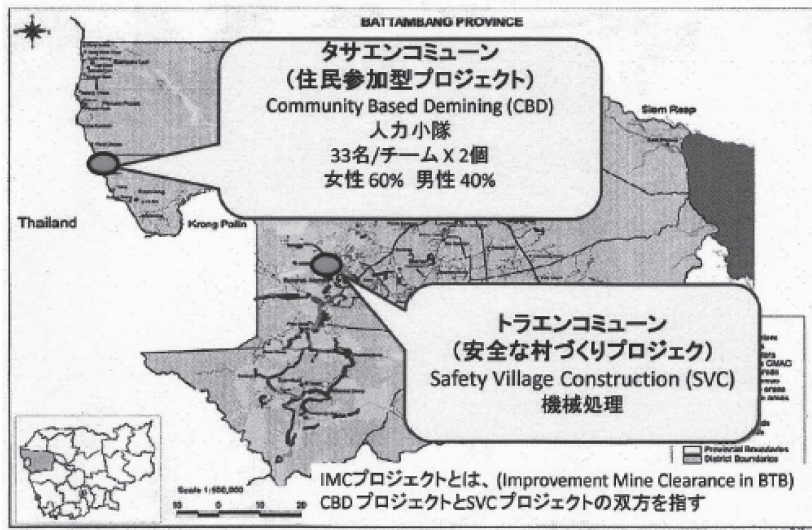
- ・不発弾処理：CBURR 員の収集情報に基づき、EOD チームが回収・爆破処理
- ・危険回避教育：計画的に又は随時に学校、住民を主対象として実施



バタンバン州での地雷処理活動



バタンバン州での地雷処理活動



○不発弾処理の成果

- ・爆弾 (通常爆弾、クラスター爆弾)、砲弾及び信管 (大砲、迫撃砲、無反動砲、ロケット砲、化学爆弾等) 245,846 発 (個)
- ・対人地雷 8,814 個
- ・対戦車地雷 496 個

■今後の課題

○ (当面)

1. CMAC の自立処理能力の向上と人材育成に寄与するため、処理に係る技術移転を推進する。



a、ランドリリリース方式に基づく地雷処理要領

b、機械処理と人力処理を一体化した処理要領

○ (中期)

2. JMAS カンボジアが、引き続きカンボジアで人道支援業務を実施できるよう、国内外を問わず、企業・NGO との連携を強化する。

撤去現場宿営地での C-MAC 小隊長 Mr. G Briefing

表 8 C-MAC (Cambodian Mine Action Centre) の日課

0645	～	0700	～	1130	～	1230	～	1500	～
朝礼		作業		昼休み		作業		Free	

2011 年度 83 ha — 1 月でほぼ完了

さらに 46ha — 予備地を作業中

被害者 18 名負傷、4 名死亡、5 名重傷、牛 4 頭死亡

埋設時期 1984 年～1998 年

ベトナム軍 PMW2

CBD (住民 参加型プロジェクト)

デミナイターの活動



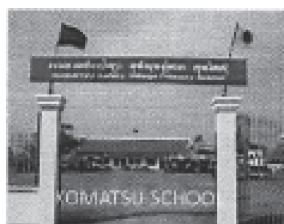
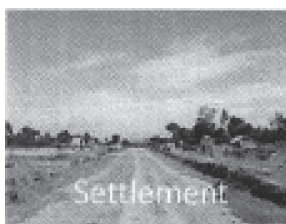
Picture taken by IMA&S

地雷爆破処理



2006年から実施した住民参加型プロジェクトは、2012年9月7日で6年間の活動を修了する。

SVC プロジェクト



ボルボト軍 72A (China)  
 政府軍 MD82B (VietNam)

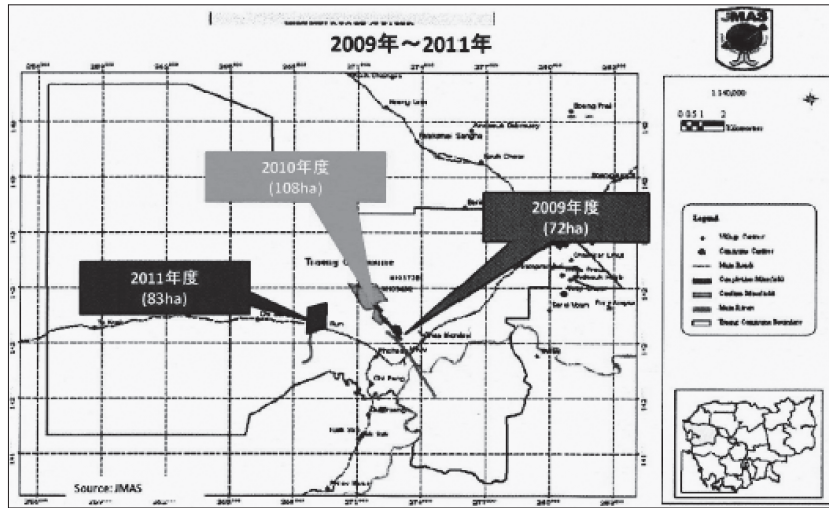
2011 年度地雷処理数 (機械処理除く)

AT (対戦車)	4
AP (対人)	313
UXO (不発弾)	69
FRAGMENTS (破片)	94,137

2011.09.09 ~ 2012.08.28

95 ha 処理  
 AT (対戦車) 4

SVC プロジェクトの実施状況



2002年～2012年 不発弾処理活動地域





不発弾処理と技術移転



危険回避教育活動



AP (対人)	316
UXO (不発弾)	69 (内飛行機から投下はロシア製 US 製各 1 個で計 2 個)
FRAGMENTS (破片)	98,861

#### 処理する地雷原の特定

2003 年にフランスの NGO が、確度の高い情報源 (村長、除隊兵士、埋設者本人など) から徹底的に情報を集めて詳細な地図を作製した。これに基づいて行っている。

杭の色 白 黄 赤

安全 ← → 危険 (写真 17 参照)

JMAS D Project Leader の案内で撤去現場見学。不発弾爆破処理観察。

1244 ~ 1330 昼食

1345 Komatsu Safety Village School

Primary School 30 人用クラスルーム × 3 + 職員室 = 400 万円 2010 年

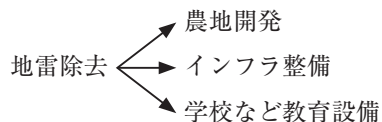
ここは 2 番目 これまでに 3 校

昨年の段階で 480 世帯入植

2002 年に APM が武器から除かれた<sup>14)</sup>

アンゴラ、カンボジアでは 2008 年からコマツの CSR で作業開始

JMAS とコマツの CSR で協同



D-8 2009-2010 入植地プロジェクト

第 1 期 80 ha 500 世帯入植 学校その他の施設

25 ~ 50 倍のところ 条件を絞り込んで抽選会

2011 年 3 月 7 日 H コマツ副社長 (早大卒) を迎えて入植セレモニー

最終的に入植するステージが最も困難をきわめる

学校の維持経費は政府がもつ 教師 (公務員の最低給) 50 \$ / 月

対象の 6 割くらいが通学しようと努力している 最低でも年間 150 ~ 200 \$ 必要になる

そのうち 6 割くらいが通学できる ∴ 全体の約 4 割弱が登校

1540 JMAS 発

1610 The Killing Fields : The Choeung Ek Genocidal Center 着

1740 The Killing Cave 発

1805 ~ 1950 夕食

2000 HTL 着



写真 17 地雷原に設置される危険度を示す杭

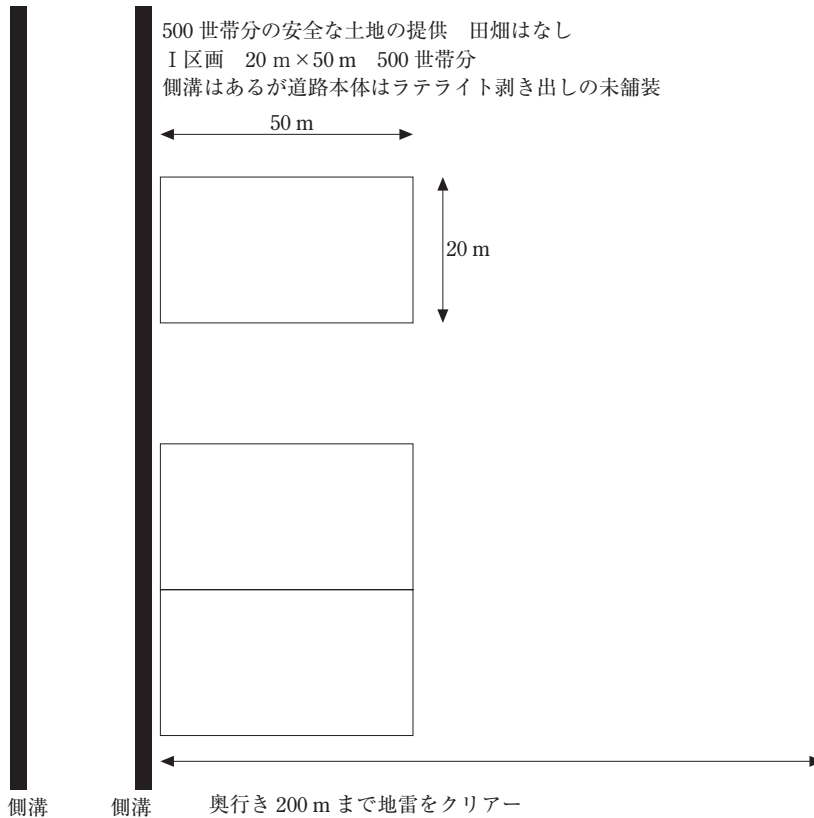


写真 18 不発弾

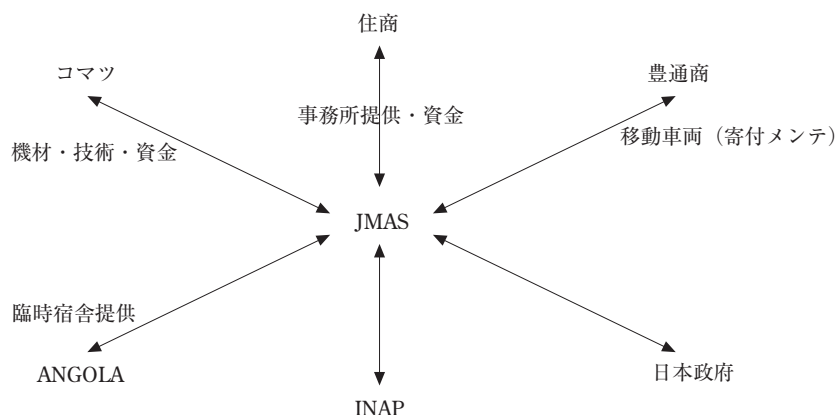


写真 19 そのすぐ側に対人地雷

村の開発



- 12) コマツの地雷撤去機は、1 基 1 億 3 千万円程度、世界に 3 基。コマツの CSR (F 氏談)。
- ・ 地中 30 cm までなので取り残しはある。それを手作業で補う (I 氏談)。農地は一般的に 20 cm 耕されるので、処理深さ 20 cm 以上ないとけない。
  - ・ 「もとはブルと考えたらよいか、戦車と考えたらよいか」「まったくのブルの改造版である。当初 25 t のブルを 35 t にした」(I 氏談)。「ベースマシンは、車体重量 27 トンの D85EX-15 を選び、地雷除去機として必要な機能である、率の良い地雷処理装置は CS210 スタビライザーの技術を応用した」：伊吹敏夫、山本茂、柳樂篤司、中上博司「製品紹介：地雷除去機 “D85MS-15” の開発、Development of D85MS-15 Demining Dozer」*Komatsu Technical Report*, 2007 ① VOL. 53 NO. 159, 27 頁。ただし、



D85MS-15は、元来アフガニスタンを想定していた。D85EX-15写真は、同29頁、D85MS-15は、同27頁、CS210スタビライザーは、品川春樹「道路再生機械〈GS500-1〉Road Recycler GS500-1」*Komatsu Technical Report*, 2003 ①VOL. 49 NO. 152、35頁。写真20、21、22を参照されたい。

- 13) 東北方面隊隷下の師団。師団司令部は青森県青森市。青森県、秋田県、岩手県に駐屯。東日本大震災救援でも活躍。いわゆる「国際貢献」は、第3次ハイチ派遣国際救援隊、第5次ジブチ派遣海賊対処行動航空隊、第3次イラク復興支援群、UNDOFゴラン高原、第2次東ティモール施設群。
- 14) 地雷除去車は、まぎれもなく兵器として使用し得る。地雷原を通過する時に、地雷除去車が先頭を走り、その通過した幅に沿って歩兵が前進できる。したがって、もし地雷除去車を許可なく「輸出」すれば、いわゆる武器輸出三原則に抵触し、かつ、運用上、外国為替及び外国貿易法と、同法に基づく政令である輸出貿易管理令に違反する。しかし、武器輸出三原則そのものが、外国為替及び外国貿易法と輸出貿易管理令が、佐藤栄作総理（当時：1967年）の口から国会答弁の場で発せられて、三原則として再認識され、それが三木内閣によって、対象国などが拡大されたという経緯を有する。対人地雷禁止条約の署名などを経て、地雷除去車についても人道的な見地から国会での審議に付され、「対人地雷問題への取組をさらに強化するための措置の一つとして、人道的な地雷除去活動に必要な機材等の輸出については、一定の条件の下でこれに武器輸出三原則等を適用しないこととする旨の決定を行った（1997年12月2日、内閣官房長官談話）。なお、2002年8月、対人地雷のみを処理する車両や地雷探知機については、その仕様等からみて『軍隊が使用し直接戦闘の用に供されるもの』という武器輸出三原則等上の武器の定義にあたらないとし、その輸出に際し許可を要しないこととしている」（外務省『外交白書』2008年版、110頁）。日本は、およそ世間の耳目を引くトピックに敏感である。2000年には、学術会議から以下の報告書が発表されている。日本学術会議工学共通基盤研究連絡委員会自動制御学専門委員会（委員長古田勝久東工大教授）『工学共通基盤研究連絡委員会自動制御学専門委員会報告：人道的対人地雷探知・除去技術の研究推進について』（2000年2月28日）。これは、第17期日本学術会議工学共通基盤研究連絡委員会自動制御学専門委員会人道的対人地雷探知・除去技術の研究推進検討小委員会（委員長古田勝久東工大教授）の審議結果を工学共通基盤研究連絡委員会自動制御学専門委員会が取りまとめたものだそうである。無論提言は、積極的に研究を推進すべしとあり、「日本における『人道的対人地雷探知・除去』のための研究開発拠点として、『日本人道的対人地雷探知・除去研究開発センター（仮称）〈JMAC, Japan Humanitarian Anti-personnel Mines Action Center〉』を創設する」とある。また、複雑かつ曖昧な武器輸出三原則については、富田圭一郎（国立国会図書館外交防衛課）「武器輸出三原則—その現況と見直し論議—」国立国会図書館『調査と情報』第726号〈ISSUE BRIEF NUMBER 726（2011.11.1）〉1～11頁が、見事にまとめている大いに参考になる。





写真 20 D85EX-15



写真 21 CS210 スタビライザ

写真 22 地雷除去機 "D85MS  
-15

## 2012 年 8 月 30 日 (移動: バッタバンからプノンペンへ; JVC 自動車修理 工養成学校)

0740 HTL 発

0900 ~ 0908 銀行でトイレ休憩

1215 Tonlesap River と王宮の間の三角地帯で、ガイドの Jさんと Kさんとが交代。バス  
と運転手 (Lさん) も交代。

### Jさんの話で印象に残ったこと

1 彼が日本に行ったときに広島を訪問した。原子爆弾を投下された都市と聞いていたの  
で大きな穴があいて池のようになっていると思っていたらそうではなかったことに驚い  
た。こちらは、内戦に明け暮れ爆弾の被害も熟知しているカンボジア人のその発想になる  
ほどと思いつつ驚いた。

2 Siem Reap の主な産業は、観光。街中の空き地はほとんど買い占められている。機を  
見て、ホテルやレストラン、マンションを建てるつもりにはほかならない。マンションは、  
4 m×12 m で 1 ~ 3 F で約 15 万ドル強。

ホテルの建設ラッシュもすさまじい。古いホテルはモダンに改築している。City  
Angkor HTL はフン・センの親しい友人がオーナー。1994 年に営業を開始した。Siem  
Reap ではいつも彼はここに投宿する。現在、国際会議のために泊まっているので、ヘリ  
コプターが邸内にあり入り口で客のボディチェックをしている。

交通量も増えて、Siem Reap 全体で信号機が 5 つに増設された。そのうち一つは、ほと  
んど意味がないので使ったり使わなかったりして実質的には 4 基が稼働している。

3 Si So Porn や Battambang では農業が主力。なかでも米。最近、二期作、三期作が試行  
されて、収入が相当アップして豊かになってきた。6.5 t ~ 3 t/ha 平均的収量であるが、1 t  
250 \$ の儲けで、ほとんどの米作者が 5 ~ 20 ha 所有している、なかには、100 ha を越え



<http://www.canbypublications.com/maps/historic-southeast-asia-1942-map.htm> Historical Map-Southeast Asia 1942 から加工して作成。Sisophon や Battambang が当時はタイ領であったことがわかる。



<http://www.canbypublications.com/maps/simpleprov.htm> Map-Provinces and Municipalities of Cambodia から加工して作成。



<http://www.canbypublications.com/maps/camroad.htm> Map-Kingdom of Cambodia から加工して作成。

るケースもある。

4 コムランは、もち米に砂糖・塩・味の素・ココナッツで味付けして、バナナの葉でくるんで、竹の筒にいれ、1～2時間焼く。2～3本で1\$。

5 韓国系のレストラン・ビジネスオフィス・観光バスが多い。日本料理のレストランもあるが、韓国の人びとは日本人と比べて住み着く人びとが多い（単に、建築や道路建設のみでなくビジネスや個人経営の商店という意味か？ 하나 투어（ハナツアー）という旅行エージェントのバスが目立った）。実際、今回ベトナムも含めて都合3台のバスを使っ

地図 5



JVC 提供。



写真 23 M 校長

たが、どれも韓国の旅行会社のバスであった。また、二日目に走った道路は、韓国の支援で造られたと称するものがいくつかあった。国際協力のパターンが興味深い。中国が道路本体を作り、照明（街灯）や分離帯、側路（本道の両脇に歩行者・自転車用の道路を造る）は韓国というパターンが多い。

6 J氏は、除隊兵士のインタビューの時に、通訳をかって出た。学生の質問に「言っている意味がわかりません。もう一度」ということが何回かあった。偏見を述べるわけではないが、東南アジアのガイドとしては、きわめて誠実で信頼がおけると思った。

7 Si So Porn 州は、同地域がタイ領時代の名残の名称で、現在では、Banteay Meanchey 州と呼ぶ。

8 Bamboo Train。内戦で破壊された鉄路の復旧は現在急ピッチで進められている。復旧するまでの間、人びとの「知恵」で活躍したのがバンブー・トレインである。竹で作った台車の下に車輪を取り付け、上に Motor Cycle のエンジンを搭載してその動力で鉄路を走り、人、家畜、バイクなどを運んだ。単線なのですれ違いができない。鉢合わせした時には、軽いほうがトレインごと鉄路から外して道を譲る。その間 1～2 分しかかからないという。鉄道の復旧で今が最後の試乗・観察のチャンスとか。

9 Jさんの発音だとバットンボンと聞こえるのだが、元来地名の由来は、バツ（失くす）、ドンボン（棒）で、「棒をなくす」という意味からきているそうで、そのように聞こえて間違いはない。タイ語とクメール語の異動については、タイ語には、クメール語にあるイエーの発音がないのが特徴的だという。ミッタパープ（タイ）、ミッタピエップ（クメー

ル：友好)、パーサークマール (タイ)、ピエサークマイ (クメール：クメール語) などいわれてみればその通りであった。

1244 ~ 1306 デパートの Food Court で食事

1315 Food Court 発

1324 HTL 着

Princess Hotel, 302 street 228 (Monivong BLVD), Phan Doun Penh, Phnom Penh

1409 HTL 発

1510 着

#### JVC 自動車修理工場 + 修理工養成学校

折悪しく、友好橋が修復工事中で大型バスは通行禁止だという。往路は、Kさんの袖の下がうまく機能して通行できたが、復路は、うまく行かず、ひどい大回りをさせられた。

#### M 校長の話

10年前、広島で日本語を少し学んだがもう忘れたので、通訳をお願いします。

1993年から日本人 (JVC) と一緒にやっている。(5、6代にわたる歴代の校長の写真が壁にかかっていた。のちに JVC 代表となる N さんや、若くして逝去された O さんなどが見える。最後は女性であった。)

1993年の選挙までは、ロシア人とベトナム人を除いてほとんど外国人は来なかった。

1985年に HINO のトラックを輸入したが、部品もないし、修理工もいなかった。

N さん 井戸を作った

O さん 車修理の専門家

彼らが、カンボジア政府の人びとに技術を教えた。

1990年に、1年コースをやった。

1993年、1回目の選挙。

そのあとから、2年コースを始めた。ポル・ポト時代に知識人ばかりでなく、修理の専門家も殺された。専門家・技術者がほんの少ししか残らなかった。その後、Oさんが来て修理の技術・知識を与えた。

今カンボジアのトヨタ、三菱、ホンダで働いているスタッフは、かつてはみなこの学生だった。需要が多いのでこれでも足りない。トータルで1,400人は卒業している。

各社からは、スーパーバイザーのようにしてきてもらっている。Oさんのおかげでいろいろうまくできた。ワークショップでお金を儲けて、学校をサポートする。また、ワークショップで学生が実地のトレーニングをする。JVCの名前は、学生の多さと優秀さで有

名になっている。

カンボジアには車はたくさんある。プノンペンでも最近修理屋が多くできたが、みなこの卒業生である。日本人のお金と、生徒のおかげでこのワークショップができた。

カンボジア政府はいつも貧しいから手伝ってもらえないが、その代わりに土地を少しもらっている。日本の援助の中では、JVC、政府、民間からはじめはあったが、2000年からは援助が終了し、自立してやっている。

カンボジアの先生は活動しながら、スタッフががんばって運営している。MはもともとOさんの学生だったが今は校長。東京と広島で2回日本でも勉強した。現在日本人の指導者はいない。カンボジア人だけでやっている。日本人の指導方法にしたがって指導している。日本からずっと支援してもらうのは悪いと思っている。現在は自立している。「一緒に頑張る自分で」これが一番良い言葉だ。

Q：これまで街中にあった修理工場を移転したことによって生ずる減収をどう乗り越えていくのか。

A：移動したのは日本大使館、外務省から支援をもらって、日本人Pさんががんばってくれたおかげでこの土地を得た。

Q：街中にあった時よりもお客が減って収入が減ったと思うがそれをどう克服するのか。

A：CJCC (Cambodia-Japan Cooperation Centre) の支援のおかげでよくなった。専門家が来て、経理・経営を見てもらったら、倒産しますよと言われた。彼が帰ってから自分たちで考えて、1 給料を減らす、2 人員を減らす、3 交代制をとり入れた。これで乗り越えることができた。結局今のほうがうまくいっている。

Q：競争相手はいますか。

A：競争はあるが、ここは政府が一部資金を出しているのでもうまくやっている。他は、民間の会社で資金があるので、機械等も新式のものを使っているのでも、そこが弱味である。卒業生たちとコネがあるのでお互いにうまくやっている。

Q：卒業生のリクルートはどうやったのか。

A：JVC が始めた頃は、三菱、ホンダ、スズキ、イスズ、日産などはなかった。ここに彼らが進出してきてから試験で採用してきた。

Q：この研修学校の入試はどうなっているのか。

A：条件は、中卒。入試は、数学、化学、物理学、クメール語（文化・文明）。東京でのやり方に倣っている。実際に申請する人びとは高卒。中には大卒もいる。カンボジアの中では30社くらいあるが、カンボジア人のスタッフは足りない。専門学校には来ないと思ったが、一部はここを希望している。専門家を生み出すのは難しい。ほとんど田舎からきている。

Q：田舎にはどうやってこの学校を知らせているのか。つまり宣伝はどのようにやってい

るのか。

A：広くは知られていない。親戚とかに聞いてくるわけでもない。カンボジアではPRはしていない。

Q：90年ごろ車の整備は難しかったという話だが、それまでどうしていたのか。

A：90年ごろの最初のうちは、日本人のお金でCM、PRをしていた。

Q：Khao I dangにあった難民キャンプの中のJVC整備士学校とは何か関係があるのか。

A：まったくない。

Q：ここでは、ビジネスの勉強は何かさせているのか。

A：やっていない。何かできないかと思っているが、能力の関係で専門技術に絞っている。実技を伴うので資金が必要になる。マネージメント等は、話だけで設備を伴わないが、ここではあえて設備に投資している。2015年のASEAN大会までに、他のASEAN諸国に比べたらカンボジアは低いのもっとがんばらなくてはいけない。さらに、新しいエンジン設備など使ってうまくいくように計らっている。

Q：日本人が去り、日本の支援金がなくなった後、カンボジア人のみで自立するにあたり、制度等は変えたところはあるか。

A：日本人のやっていた時と変わったものはないか？ 変わったものは、所有資材。当時は新しいものだったが、今はもう古くなった。

Q：入学から卒業までいくらかかるか。

A：学費は成績が良ければ1年間50\$、入試の成績が悪ければ高くなる。最高で250\$となろう。

Q：寮費は別にしてか。

A：寮費は、1年間で50\$。キャンティーンの食費は自分で払う。

Q：生徒の何%が寮に居住しているか。

A：100%。皆田舎出身だから。

Q：奨学金は？

A：学費50\$と250\$との間で差をつけることによって奨学金としている。

Q：一番の問題は？

A：第一に、貧しい生徒をどうするか。食事なども安いものばかりしか食べない。肉などの入っていない野菜ごはん、見ているだけでも気の毒になる。だが自分もみんなを食べさせるお金はない。彼らの生活は大変である。アルバイトを作ってやる。勉強午前中、午後は整備。バイクパーキングの整備などをやらせている。

Q：入学した生徒は全員卒業するのか。

A：ほとんど全員卒業する。大変なのは在学中に食べるもの。とにかくお金がない。2年間の授業の途中で、タイ、マレーシア、日本などへ労働者として行って、お金をためて、

また戻ってくるケースも多々ある。田舎では海外労働者は多い。カンボジアで平均月 40 \$ として、タイでは 300 \$、韓国では 1,000 \$ 稼げる。今はむしろ少し労働者不足気味になっている。カンボジアには日本企業などをもってきても専門家が足りない（例としてミネベアをあげる）。専門家は足りない。卒業生を採用したうえ、日本から専門家が来て教えている。

Q：現代、起重などには卒業生は就職するか。

A：この学校は日本人が創ったから、韓国の会社は採用していない。韓国は自分たちで学校を創った。NPIC（National Polytechnic Institute Cambodia）は韓国の資金で創られた。

Q：夜間学校は開設したか？

A：まだだ。2000 年頃、一応創ったが、一部専門を持っている人に追加するコースだ。

Q：支援がなくなったところで、その後うまくいった最大の理由は何か。

A：日本はカンボジアのみでなく世界中で貧困国を支援している。2000 年にカンボジアは支援金が切れたが成功した。理由は日本の先生からもらった知識をそのまま使って継続したことだ。学校の名前は JVC で日本関係である。日本は支援をやめた。一部のスタッフは JVC という名前を消したいと言ったが、所長は、ここを創るときに支援してくれた日本との関係を保つためにも JVC という名前を保持したい。JICE という NGO。日本の援助でできたが、名前も変えて、日本の支援でもたらされた機材も持ち去られた。O さんはよくやった。内戦の時も一緒にジャングルの中まで逃げた。Q さん（O 夫人）は子どもとともにまだカンボジアで暮らしている。

Q：教えるときに最も気をつけていることは何か。

A：第一に cultural power、第二に technical power、第三に business power（activity）だ。それから、5S も（「整理（Seiri）」「整頓（Seiton）」「清掃（Seisou）」「清潔（Seiketsu）」「しつけ（Shitsuke）」）。

Q：ワークショップは、月に何台くらい扱うか。

A：120 台から 160 台。（われわれの訪問時は、4、5 台であった。1 台民間の大型トラックを除いて他はすべて JVC など日本の NGO の車両であった。）

1705 発

1828 ~ 1930 夕食 Restaurant Soria

1940 HTL 着

2012 年 8 月 31 日（プノンペン王立大学と日本大使館）

0837 HTL 発

0905 プノンペン王立大学外国語学部日本語学科着

Royal University of Phnom Peh, Institute of Foreign Language, Department of Japanese

ロイ・レスミー学科長

Head of Department, Loch Leaksmy

#### 0910 プログラム開始

##### 学科長の話

学科長ご自身は、昭和女子大学の修士の学位。

日本語学科は開設して7年目になる。この7月には日本の皇太子殿下がご訪問された。学生たちに「一人ひとりの交流が国と国との交流に発展する」とおっしゃった。日本の大学とも交流がある。早大には毎年1名派遣している。今日から7日までは、すべて日本の大学からの訪問プログラムで埋まっている。神戸学院大、5日に駒沢大……。九州のある国立大学から全く知らない教授が国際電話をしてきて、文科省のSVを使って訪問したいという申し入れもあった。

ここの日本商工会は4年前メンバーが30数社であったが、学生53名に対して12社から求人があった。2012年には100数十社に増えて、昨年は学生31名に対して40社から求人があった。Local caravan を組んで地方に、プノンペンには日本語の勉強があることを伝える。

この学科ができる前は、JICA/JOCV が日本語教育をやっていた。学科長は当時（1994年）理系の生物学科の学生だったが、昼休みに日本語を勉強した。学科の設立能力ができたときにJICAは撤退した。開設当初は人気があったが、韓国語のコースができたときに少し低迷して、現在は盛り返している。ポル・ポト時代に知識人が殺されたので、小・中学校で身につけるべき知識を身につけていないのが情けない。アメリカ、フランスなども良いけれど遠い。日本は近いし、同じアジア人である。日本の技術等をシェアすればカンボジアも伸びると思う。カンボジアは若い国でどこへいっても、10代、20代、30代で占められている。奨学生は若い。社会人もいて10年くらい老いている。19歳から40歳くらいまでだ。ここの学科は1～4年生まで。CJCCが社会人向けの昼夜コースを開いている。日本語学科で2級合格が少なかったが、去年からレベルが上がってきて、2級合格者が増えている。

#### 1215 着

1230～1310 食事 総統中餐厅 Le President Restaurant, Le President Hotel

#### 1320 発

日本の学生13名とカンボジアの学生が乗り込んで、初めてバスが満席状態。レスミー先生が、「学内のキャンティーンは衛生上問題があるので」といかにも高級そうな中華料





写真 24 キャンパス地図

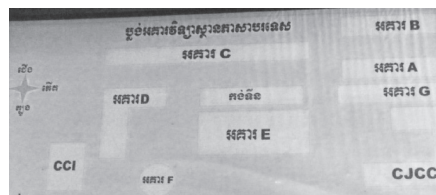


写真 25 外国語学部配置



写真 26 日本語学科スタッフ室ドア

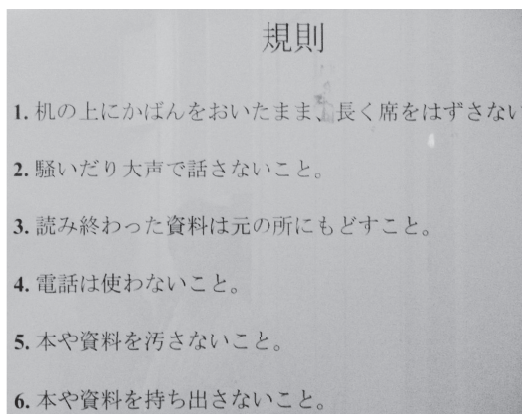


写真 27 日本語学科図書室規則



写真 28 CJCC 外国語学部の隣の建物であった

理店に案内してくれた。しかし、注文したのが、麻婆豆腐に八宝菜にはいささかがっかり。請求書がロスミー先生に渡されると何の躊躇もなくさっと山田先生に。山田先生も間髪いれず、会計係の学生に渡す。受け取った学生、額をみて「これってほくたちのおごりってことですかね」、「ああ」と山田先生。再び全員バスに乗り込み、大学でカンボジアの学生を降ろして（1329）、反対方向の日本大使館へ。

少し早目に到着してバス内で時間が来るのを待つ。

## 1526 入館

### R 参事官 S 一等書記官

#### R 参事官

昭和 57 年入省。カンボジア語専門を命じられ、通常 2 年間現地（当事国）で研修するが、内戦中であったためにフランスで研修、その後さまざまな地を経て 1996 年～2000 年にカンボジアに第一回目の赴任、2011 年 12 月から二回目の赴任で現在に至る。

カンボジアの気候は、12 月～1 月がヒマラヤから冷たい風が来るので涼しい。だからと言って厚着をするような気候ではない。単に暑いために記憶の中の季節感が喪失される。日本であれば、あの時は雪があったとか、暑かったとか何か記憶を手繰るすべがあるが、ここではない。ただし現地の人びとは何か小さな相違をつかんでいるようだ。

人口は、1,200 万人。ロン・ノル時代に 700 万人で、ボル・ポト時代に殺害された人等の数については、常識的に、100 万～200 万人といわれる。反ボル・ポトのソ連は 300 万といい、逆に中国などは数 10 万人という。

民族の 90% はクメール人である。ただし、純粹のクメール人は、ライオンのように、目がギョロツとして、浅黒く、唇が分厚く、鼻が座っていて大きい。しかし、中には色白の人や、今の範疇に入らない人びとがいる。これは中国との混血で、1/2、1/4、1/8、1/16、1/32 という血が入っている。中国の血が濃く色が白いほど金持ちとみられる。元来清朝末期に、海南省、潮州から南下してきた中国系との混血である。東南アジア一帯に広がり、さまざまな階層・職業を形成している。中国系が、混血せずに区別されているのは、日本、朝鮮、ベトナムのみで、他の地域は、渾然一体となっている。

プノンペンには、フランスによって、人口 70 万人規模の都市として設計された。王宮、フランス人街、それを支える中国人街という構成である。現在は、首都圏 200 万人（全人口の 1/6）と言われ、旧市街は整然としているが、新興地は雑然としている例も多い。

言語は、クメール語であるが、日本語と同じで、抽象語はサンスクリットから借用している。タイ、ラオ、ミャンマー、シンハラと同じ。語法は SVO でテンスはない。表音文字なので新しい言葉を創るのに苦勞している。「食品安全委員会」といえばサンスクリット、「食品の安全を確かめる人びと」と言えばクメール。Khmae = 大和で、Campuchea = 日本で、Cambodia = Japan と思えば良い。地球化などという単語は、訳しようがな

く、また、訳したとしても、地方などに行って使っても理解されないだろう。

宗教は、南方上座部仏教、少数のキリスト教徒はもっぱらベトナム系である。

歴史。9～13世紀のアンコール王朝は、最大の版図を誇った。14世紀以降には、タイのアユタヤ王朝。ベトナム・フエの阮王朝双方から圧迫を受ける。19世紀末にフランス領となるが、主権国家概念がそのままあてはまる「カンボジア王国」ではなかった。日本の明治維新前に似ている。どこそこの殿様が、年貢を徴収しているというのに似ている。

1941年、日本の南進で、日本とヴィシー政権とが共同で治安を維持する協定を結んだ。無論、戦後に、ドゴール政権が宗主国として復活する。1953年に、カンボジア王国として独立。

60年代はフランスが作っていた統治マシンがうまく機能していた時代。当初、シアヌークは、西よりの政策、アメリカ、台湾を支持し、ベトナムでも南ベトナムを支持した。ただし、植民地期に中間管理職として登用されたベトナム人と直接対峙した経験から、ベトナム人は憎まれていた。その後ベトナム戦争に巻き込まれてもしょうがないということから、徐々に中国よりになっていった。そのために国内で共産主義イデオロギーが流布、当初たくみに両者のバランスをとっていたが、フランス帰りのインテリたちが力を増すに従って、左を徹底的に弾圧し始めた。そのため、彼らは地下にもぐりフランス帰りのマオイストたちがクメール・ルージュの中で増加していく。右派がたまたまなくなり、クーデタをおこし、シアヌークは、北京・平壤などで亡命生活に入る。

その間、救国宣言を、クメール・ルージュなどに発信、クメール・ルージュは、シアヌークの呼びかけにこたえて蜂起したと言明した。フン・センもシアヌークの呼びかけにこたえて立ち上がったと言明した。クメール・ルージュはあまりにも極左なのでたもとを分かったと。ただし、シアヌークは、ベトナムの侵略はまことにけしからんと演説した。

1979年から約10年間、ベトナム・ソ連の支持を受けるヘン・サムリン政権と中国支援のボル・ポト派、中米支援のシアヌーク派、米支援のソン・サン派（ロン・ノル系）の三派連合との対立となった。三派連合内の軍事力は圧倒的にボル・ポト派であった。雨期になるとクメール・ルージュがゲリラ戦を展開し、乾期になるとベトナム軍が戦車を展開して、一進一退が繰り返された。

1990年代に入り、中越間で、東南アジアに共産党一党独裁政権を維持することで瞬間的に意見が一致し、カンボジア人同士を戦わせるのをやめようという結論に達する。クメール・ルージュは選挙の妨害工作に入り、勢い余って空港近くの中国工兵部隊駐屯地をおそってしまい、これが中国の逆鱗に触れた。

フランスは、ハノイ・サイゴンを直轄市とした。安南（フエ周辺）の阮王朝を維持、カンボジアでも一民族一国家の原則で、カンボジア王朝を残した。1864～1867年は、フランスの保護領。最高権力者＝王としたが、日本のように万世一系ではない。14世紀以降

の系図がわからなかったものを19世紀にフランスが来て、歴史的に整理したが、その前のアンコール王制とつながらない。

和平達成後、シアヌークは、国父、王位を父に譲り、選挙結果からラナリット派とフン・セン派とのバランスをとって、二人首相制、二人大臣制にした。こうした混乱から国連での議席を失い、ASEAN加盟も先送りにされた。

2006年以降、法改正して、首相の選出は、2/3ではなく1/2でよとした。そのためフン・センは盤石の基盤のもとに27年間首相をやっている。今後も2015年の選挙も2018年の選挙も勝つと豪語している。地区評議会選挙、下院選挙は国民が直接投票で行う。

2012年の地区議員選挙では、全議席の8割をフン・セン派が占めた。

以上の講義は、筆者のメモであり、実際には、以下のレジュメに基づいて行われた。区切りはオリジナルの頁区切り。文中、ポイントの大きい文字はレジュメのオリジナル文、小さい文字は上の講義録に収まっていない参事官、一等書記官の発言や一問一答形式の質疑応答についての筆者のメモである。

## カンボジア王国概況と日・カンボジア関係

平成24年7月10日  
在カンボジア大使館

### I カンボジア王国概況

#### 1 自然と社会

- (1) 地理：メコン地域（ミャンマー・タイ・ラオス・カンボジア・ベトナム）
- (2) 気候：6～10月が雨季、11月～5月が乾季。3～5月がもっとも暑い。
- (3) 面積・人口：面積は日本の約半分。人口は日本の約10分の1。
- (4) 民族：90%がクメール人とされる。中国人、ベトナム人、チャム人との混血も多い。
- (5) 言語：カンボジア語（クメール語）。
- (6) 宗教：仏教（95%）、イスラム教（3%：チャム系）、キリスト教（少数）。

#### 2 歴史

- (1) 9～13世紀のアンコール王朝期にはインドシナ半島の大半を統治し、アンコール遺跡に代表される大規模な石造建築を誇ったが、14世紀以降のタイ・ベトナム双方からの侵入により国力は衰え、19世紀末にはフランス保護領の「カンボジア王国」となった。1945年3月に日本軍がフランスの武装解除を行った。
- (2) 1953年にカンボジア王国（シハヌーク国王）として独立し、1960年代には平和を保っていたが、1970年のクーデタ（ロン・ノル将軍）後に内戦が始まった。
- (3) 1975年—79年に全土を実効支配したクメール・ルージュ（ポル・ポト首相）時代に、飢餓

と処刑により、100 万人とも 200 万人とも言われる国民（約 2 割）が死亡した。

- (4) 1979 年から約 10 年間、ベトナム及びソ連の支援を受けるヘン・サムリン政権と、中国支援のボル・ポト派と西側支援の二派（シハヌーク派、ソン・サン派）から成る三派連合による内戦が継続した。
- (5) 1990 年代に入り、冷戦構造の崩壊もあって和平への機運が高まり、1991 年に和平協定が署名され、1992 年の UNTAC 暫定統治、1993 年の総選挙を経て同年に新生カンボジア王国が誕生した（シハヌーク国王が再即位）。
- (6) 和平達成後、新政権の内部対立により 1997 年に武力衝突も発生したが、1998 年、2003 年、2008 年と総選挙が大きな問題なく実施された。また 1999 年には ASEAN 加盟（2012 年、2 回目の議長国）、2004 年には WTO 加盟を果たした。

### 3 政治体制

- (1) 政体：国王を元首とする立憲君主制（シハモニ国王：2004 年即位）

- (2) 立法：二院制

ア 上院：定数 61、任期 6 年

人民党 46、サム・ランシー党 11、その他 4

イ 国民議会（下院）：定数 123、任期 5 年

人民党 90、サム・ランシー党 26、人権党 3、フンシンベック党 2、愛国党（旧ノロドム・ラナリット党）2

- (3) 行政：議院内閣制。首相の下に、閣僚評議会及び 25 省 2 庁。

首相：フン・セン（旧プノンベン政権下（1985 年 1 月）から数え、27 年間首相在職）。

- (4) 司法：三審制。その他軍事裁判所、クメール・ルージュ特別法廷あり。

— 2 —

- (5) 地方：「首都/州」「市/郡/区」「村/地区」の 3 層構造。村/地区の議員は公選制。

### 4 最近の政治情勢

- (1) 内政

ア フン・セン首相率いる人民党が安定政権を維持している（2012 年 6 月の村・地区評議会議員選挙でも人民党が勝利）。

イ 2004 年に策定された「四辺形戦略」に基づき諸改革を標榜。

「良い統治」のための 4 つの課題：汚職撲滅・司法制度改革・行政改革・軍改革、4 つの重点開発分野：農業・民間セクター・インフラ整備・人材育成

国の言うことをきかない司法、法の支配に基づく行政、将軍等は数が多いので減員する

要はいわゆる good governance の実現

ウ 2006 年 7 月にクメール・ルージュ裁判特別法廷が設置。

2007 年に 5 名の被疑者が拘留された。2010 年 7 月、第一次案（ドゥイット元収容所長）の一審判決（懲役 35 年）が出され、2012 年 2 月には最高審が最終判決（無期禁固）を下した。また 2011 年 6 月には第二次事案（元 KR 最高幹部 4 名）の第一審冒頭審問が行われ、現在も審理が行われている。日本は当初より積極的に関与、これまでに経費の約半分を拠出、上級審判事（7 月で退任）、捜査分析官や広報官に日本人が就任。

野口上級判事 ドゥイットはトゥールスレイン所長

最高幹部と擬されるのは、イエン・サリ夫妻、ボル・ポト夫妻、キュー・サムバン

## (2) 外交

ア 中国との関係：要人往来（2009年習近平国家副主席、2010年呉邦国全人代委員長、2011年周永康政治局常務委員等、2012年胡錦涛国家主席（国賓）、2012年梁光烈国防部長、2012年賀国強政治局常務委員等。フン・セン首相は毎年1回は訪中）、投資（累積第1位）、援助（大規模インフラ等の借款が中心）などで近年急速にプレゼンスを増大。

フン・センが演説で中国の支援を確認

イ タイとの関係：2008年プレアビヒア寺院の世界遺産登録を機に、国境問題が顕在化。2011年2月上旬に大規模な武力衝突が発生。2月22日、ASEANは停戦、両国へのインドネシア監視員の派遣等を決定（未実施）。また、7月には、カンボジアの要求に基づき国際司法裁判所（ICJ）は、同寺院に関し、仮保全措置命令を行った。インラック・タイ政権発足後、小康状態が続いている。

ウ 米国との関係：2010年10月にクリントン国務長官が訪問し、今後関与を深める方向（軍事交流など）。貿易面では米国が最大の輸出相手国（縫製品）。

エ ベトナムとの関係：フン・セン政権母体の人民党とベトナムは伝統的に友好関係にある。近年、航空（カンボジア・アンコール航空）、電気通信（Metfone）、銀行、ゴム栽培、農業などでベトナムからの投資増加。

オ ASEAN：2012年、2回目のASEAN議長国を務め、2015年ASEAN共同体構築・加盟国間の開発格差是正等の推進・加速を提唱。

スカボロ——ベトナム ASEAN会議で最終共同コミュニケを出せなかった

EEZ 大陸棚——インドネシア

カ その他：国連PKOに地雷処理部隊や工兵部隊を派遣（現在、南スーダン、レバノンに派遣中）するなど国際社会への貢献を行っている。

## 5 経済・経済協力

(1) 概況：1人あたりGDPは851ドル（2011）。過去10年間の平均経済成長率は約7.8%。 Laosよりはるかに大。

(2) 貿易：輸出は年間約47億ドル（2011）。米国向けの縫製品が最大の輸出品。

輸入は年間63億ドル（2011）。織物、車両、石油製品など。

(3) 投資：中国、韓国、マレーシアからの投資が多い。2011年に関しては英国（22億3,790万ドル）がトップ（アンモニア尿素肥料の生産に対する投資）。日本は13位、1%程度。

分野は観光業が投資承認額の半数。建設、エネルギー等。

(4) 財政：国家予算の約3割を外国支援に依存。徴税体制強化による税収拡大が課題。

(5) 産業：農業（GDPの32%）、縫製業（9.2%）、建設業（6.1%）、観光業（4.6%）。

ブノンベンへの大規模発電、韓国がとったが互いに出し合っている

韓流 → CM, PR

— 3 —

(6) 資源・エネルギー：石油。天然ガス及び銅等を探鉱。商業ベースの生産は未実施。

電化率は約26%。高額な電気料金（近隣国の2～3倍）。

(7) 経済協力

2011年の各国からの援助額は約12億ドル。贈与が約7割、借款が約3割。

分野面では社会経済基盤整備（農業・農村、運輸、電力、水）、社会セクター（保健、教育）及

びガバナンス分野。

## II 日・カンボジア関係

### 1 歴史・外交

- (1) 江戸時代初期には日本人町が形成。アンコールワットに日本人の落書きがある。
- (2) 1953年に外交関係を樹立、1954年にカンボジアは対日賠償請求権を放棄。  
1955年にシハヌーク国王が国賓として訪日、同年友好条約に署名。
- (3) 日本は1990年にカンボジア和平に関する東京会議を開催する等、和平に向け活発な外交努力を展開。  
1992-93年国連カンボジア暫定機構 UNTAC（代表：明石康氏）の枠内で日本初の PKO 派遣（自衛隊、文民警察、選挙監視団）を実施。
- (4) 1975年に閉鎖した大使館を1992年に再開、2002年に現在の建物に移転。
- (5) 2003年の外交関係50周年記念レセプションには秋篠宮同妃両殿下が御臨席。
- (6) 2009年の日メコン首脳会議のため訪日したフン・セン首相に対し鳩山総理より、日カンボジア友好条約55周年となる2010年のシハモニ国王訪日招待を表明。同国王は2010年5月16-20日に国賓来日。
- (7) 2012年6月27-29日 皇太子殿下がカンボジアを公式に御訪問。

### 2 経済・経済協力

- (1) 貿易：日本からカンボジアへの輸出は2億540万ドル（2011年：車両、船舶、機械類）。  
カンボジアから日本への輸出は3億880万ドル（2011年：革製履物、衣類等）。
- (2) 投資：対カンボジア直接投資額に占める日本からの投資額の割合は1%程度と低調であるが、2011年に急増。これまでは、商社、建設会社、コンサルタント会社等の ODA 関連企業が中心だが、2010年以降、精密機器・電気部品等の組立て、縫製等の製造業、さらに、メガバンクの事務所設置や小売業大手の進出が決定する等多様化。  
カンボジア日本人商工会加盟の日系企業（正・準会員）は108社。
- (3) 経済協力：1992年以降、日本はトップドナー（支援総額の約2割）。  
戦後復興・人材育成・制度整備の支援からスタートし、現在はインフラ、農業、教育、保険、ガバナンス分野を中心に支援している。

KR 裁判、日仏共同

仏：旧宗主国として、政治・文化面での活動を主力としている。

90年代まで圧倒的存在 シハヌーク・フン・セン会談などをホスト

### 3 文化・交流

#### (1) 遺跡保存修復

1983年に東京でアンコール遺跡救済国際会議を開催以降、毎年開催される ICC（アンコール遺跡保存開発国際調整委員会）の共同議長を仏と共に務めている。 品川プリンスホテル  
1994年より JSA（日本政府アンコール遺跡救済チーム）を通じ保存修復活動中。

早大：中川教授 上智大：石沢教授

#### (2) 人的交流

イ 在カンボジア在留邦人数は1,201人（うちプノンペン在住者842人（2011年））。

また、2011年は15万6,314人の日本人が来訪。

ロ 在日カンボジア人数は2,770人（2011年法務省統計）。

また、1992年以降日本が受け入れたカンボジア人国費留学生は700名近くに上っている。

法人在留届ベースで1,200人（現在）

関東入管で2,740人

留学生累積 2,700人 日本人は親切、優しい、街はきれい、物は豊富、JICA系の研修生が多い

KR裁判について

第2次案 KR裁判のweb siteでは2018年までに終了の可能性

第3次案 さらに続きうる可能性続く限り関係者は給料をもらえる

第4次案

カン・ゲック・イアウ（Kaing Guek Eav）（通称ドゥイッ（Duch））

— 5 —

（参考）

〈対カンボジア経済協力実績（億円）〉

年度	円借款	無償資金協力	技術協力	合計
2007年度	46.51	68.92	37.84	153.27
2008年度	35.13	53.11	39.78	128.02
2009年度	71.76	106.62	44.46	222.84
2010年度	0	107.91	44.17	152.08

（注：金額は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績ベース。）

〈日本の対カンボジア投資額〉

（出典：カンボジア開発評議会（CDC）、認可ベース。SEZへの投資を含む。）

2011年：7,500万ドル（ワイヤーハーネス等）

2010年：3,500万ドル（小型モーター、その他）

2009年：1,100万ドル（縫製、その他）

2008年：5,390万ドル（通信、その他）

〈対カンボジア投資総額に占める日本の割合〉

（出典：カンボジア開発評議会（CDC）、認可ベース。）

2011年：1.32%（9位）（1位：英国 2位：中国）

2010年：1.25%（11位）（1位：韓国 2位：中国）

2009年：0.08%（13位）（1位：中国 2位：シンガポール）

2008年：0.07%（12位）（1位：中国 2位：韓国）

2007年：8.4%（6位）（1位：マレーシア 2位：中国）

2006年：0.09%（14位）（1位：韓国 2位：中国）

Cool Japan



Korea popが非常にはやっている

〈カンボジア貿易額：輸出〉

2011年：4,708百万ドル

2010年：4,280百万ドル

2009年：3,907百万ドル

2008年：4,708百万ドル

2007年：4,089百万ドル

〈カンボジア貿易額：輸入〉

6,373百万ドル

6,005百万ドル

5,448百万ドル

6,509百万ドル

5,470百万ドル

ダイソー1\$ショップ

70%は日本製



主要相手国：米国、香港、欧州主要相手国：中国、タイ、香港、ベトナム

※日本はカンボジアの輸出入とも2～4%程度。輸出相手国としては、第10位（2011年）、輸入相手国としては第7位（2011年）。（出典：カンボジア経済財政省）

Q：GMS についてのカンボジアの反応と実際の進捗状況はどうか。

A：1号線の拡幅が出来ていない。住民が密集していてカンボジア政府が待ったをかけている。Flag project として橋等ある。土地開発のたびに結構問題が起きていて、新聞報道なども出ている。選挙後に動きが出るかもしれない。

Q：フン・セン体制の今後は？

A：長期政権ありきでひずみがあるという見方もあるが、一方で、物資がこれだけ出回る社会は、体験したことがない。貧富の格差がはげしくなっているので、いずれかの選挙で、それが噴き出す可能性も多いにありうる。ただ、欧米の援助は、人権等ベンチマーク・マークがきびしくうとうしいとフン・セン自身はよくいう。中国は、そういうことはない。今日は今日、明日はもっともらう。

Q：戸籍の登録はどうなっているのか。

A：地方選挙の際に選挙人登録をしているので、それが戸籍の代わりをしている。税金を取れば、国庫収入が上がり、公務員の汚職やアルバイトは減るだろうと言われてはいるものの簡単にはいかない。徴税がうまくいっているのは世界的にみてスイスと日本くらい。フン・センは権力者であるが、要は、メッシュやざるであり、日本のように布で締め付けていくような形とは違う。

Q：カンボジアの安全保障は？

A：カンボジアの安保上、米中は重要。カンボジアがASEAN で宣言を出せなかった背後に米国の圧力があつたかなかつたか、それはわからなかった。大抵、日常の外交官同士の会話などから、もれてくるものであるが、それもない。

Q：土地に関しては何か進行しているか。

A：土地登記のプロジェクトが世界銀行のもとで進んでいる。ボエンカック湖という結局立ち退き問題で終わったが、100万件を目標にやった。平和的に5年間占有すれば、それを公的機関が認めれば、所有権が生ずる。カンボジアの実定法上外国人は土地所有が出来ない。カンボジア側51%、外国人49%でconcessionは、最大1万ha、99年間である。鉱山、北部、中越国境沿い、国道沿いにconcessionが多い。

Q：韓国の進出が目立つが日本と比べてどうか。

A：カンボジア人に言わせると、韓国に比べて日本が弱いのは日本企業はリスクを取りたがらない。現地の人と丁々発止しないで済む環境を整えてくれという要求が最も大きい。疑似先進国の環境を整えてほしい。中国人の場合は、とりあえず住めればよい。そこを中

国的空間に変えてみせる。

Q：警察官と治安の関係はどうか。

A：公務員、警察官・教員は、\$ 60/月である。これでは到底家族を養えない。警察は過剰人員が多い。産業がないので、何もかも公共セクターに吸収した。うまくいくわけがない。

(当初の話に戻り)

[参事官] 1992年にカンボジア再興国民会議日本国常駐代表部として現地での駐在が再開された。1993年からは、国家になったので大使館となった。今川大使（早大出身）が\$ 350/1泊のホテルに赴任した。

1711 退館出発

1758 着～1910 紅宝石中西美食庁 Thmorda Restaurant, No. 90°-Beo Kampuchea Krom St., Phnom Penh

1918 発

1932 HTL着

### 2012年9月01日（ポル・ポト政権下の虐殺現場を巡る）

午前中はフリーにして、学生はプノンペン大学の学生たちと交流

1400 Htl 発

1410～1530 Tuol Sleng (Former Office S. 21) Genocide Musium “Kampuchea Democratic 1975～1979”

約2万人収監されたと推定されているが生存者は7名である。そのうち2名の方が出口に近いところで回顧録などを売っていた。そう紹介されるや山田教授が「どうか長生きしてください」というとにっこりほほ笑んで深々と腰を折った。もともと高等学校であったところを収容所・取調室（拷問）に変えた。A棟は、部屋も広く、高級官僚、軍人用として使用された。1階に10室、2階・3階に5室ずつ配置されている。尋問の内容は単純で、「おまえは、ソ連のKGBのスパイか」「中国のスパイか」「CIAのスパイか」という3問のみであった。処刑は、Killing Fields：The Choeung Ekで行われる。こうした収容所ないしは刑務所は全国で388ヶ所、処刑場は409ヶ所確認されている。

1558 着 The Killing Fields：The Choeung Ek Genocidal Center

水田地帯のはずれに緑の一角がある。Tuol Slengから約30分、Tuol Slengの刑務所から連れられてきた「囚人」はここで「処刑」された。被処刑者は1900頃収容所を出発し、午前2時3時になるまで処刑が続けられた。終わらない場合は1泊させて翌朝から再開さ

地図 6 The Killing Fields : The Choeng Ek Genocidal Center



れる。叫び声などが漏れないために、スピーカーで音楽を流したという。1,000人以上埋められた穴も発見されている。服をはがして使う。処刑の武器は砂糖椰子の葉の茎（ギザギザの棘がある）、棒、鎌、シャベル。乳幼児は堅い木にたたきつけて殺す。逃げ出そうとする者を銃で撃つ。掘り出された遺骨は8,985柱、中央のガラス張りの慰霊塔に納骨されている。

1911 Killing Fields 発

1810 着

1815 ~ 1940 食事 紅宝石中西美食庁 Thmorda Restaurant, No. 90° - Beo Kampuchea  
Krom St., Phnom Penh

1944 発

1958 HTL 着

2012年9月02日 (移動: プノンペンからホーチミン市へ)

1135 HTL 発

1201 空港着

VN921 PEN-SGN 1405 TO 1441 TD Airbus A321 VNA353

ガイドがT氏、運転手がU氏

サイゴン大教会（聖母マリア教会）、中央郵便局（旧サイゴン中央駅）などまわる。

1700 頃 HTL 着 Saigon Hotel, 41-47 Dong Du St., Dist 1, Ho Chi Minh City

1930 乗船

1948 出航

1935～2050 メコン川をクルーズする船上で食事

2136 着岸下船

2150 HTL 着

### 2012年9月03日（ベトナム戦争関連博物館など）

クチトンネル（解放戦線がゲリラ戦用に掘り巡らせた総延長 250 km といわれるトンネルの一部が当時の兵器などとともに公開されている）、統一会堂（旧大統領官邸）、戦争証跡博物館、ベントイン市場など

2012 夕食 TPHCMC

An Restaurant (An nham Co.)

71/5-71/6 Mac Thi Buoï St., district 1, Ho Chi Minh city.

### 2012年9月04日（移動：ホーチミン市から東京へ）

VN300 SGN-NRT 0025 TO 0555 (0755) TD Airbus A330-200 VA37A

解散

### おわりに

以上が、2012年度「紛争解決論実習2」の主たる実習地カンボジアの簡易記録である。帰国後の補足調査が不足している部分が多々あるが、記憶や感動が薄れないうちに、あえてできるだけ早く活字にしておくことを優先した。

山田満教授のアレンジメントによって、見事に内戦がもたらした傷跡をたどり、その復興への手がかりが那邊にあるかを認識させてくれる実習となった。参加した学生たちも各所で活発な質問を繰り返し、先方からも異口同音に「さすが早稲田の学生」とお褒めのことばを頂戴した。誇りに思う。

カンボジアの首都から「田舎の中の田舎」に至るまで足を伸ばしたが、どこにも共通して見られたのは、韓国、中国の進出のすさまじさである。とくに韓国の存在感には圧倒された。馬齢を重ね、異国の地にいると、思いもよらず愛国的な感覚が頭をもたげてく

る。今回同行したようなタフで優秀な学生たちがかの地における日本のプラス志向の存在感を取り戻してほしいと自然に願わずにはいられない。

もうひとつ直感的にひしひしと迫ってきたのは、「次はミャンマー」という底流がここで形成されていることであった。東アジア全体での大きな方向転換にほかならない。

カンボジアにあって、否が応でも頭にこびりついて離れなかったのは、周辺農村地域の赤貧洗うがごとき生活実態であった。時には、おさなごを置いて、30ドル、50ドル、100ドルというその実態を調査しに来た日本の学生ならば一晩のコンパで費やしてしまう程度の現金を求めて、1カ月も2カ月も出稼ぎに出なくてはならない。体内に銃弾を残し、治療費もなく未だに痛みを耐えながら細ぼそとその日暮らしに明け暮れる。何にもましてさしたる理由もなく虐殺された200万ともいわれる尊い命。何年もたつて発掘され展示され髑髏（しゃれこうべ）になって虚空をにらみつけている。些細な結果であれ、結果には必ずそこに至る理があるという社会科学の分析の鉄則を放棄したくなるような瞬間であった。

社会調査にあたって、感情移入したり感傷的態度で臨んだりすることは禁物である。インタビュー調査をしたインフォーマントからは全く聞かれなかったことが2点あった。第一は、他者に対する批難である。本稿ではごく一部の方を除いて氏名をアルファベットで置き換えた。このような取るに足らない論攷であっても万が一にも協力者に迷惑をかけてはならないという配慮であることはいままでもない。どうやらその必要がなかったほどに、誰に対しても批難や要求がましい発言はない。よほど手痛い目にあつて時の権力との関係に話が及ばないように注意していたか、本心から「諦めて」いるのかどちらかだろう。第二に、同じ国民が複数の陣営に分かれて「殺し合い」を演じたにもかかわらず、自らの境遇に照らして「敵」を名指して批難することがない。よほど「生きづらい」世の中が形成されたに違いないと想像するのは容易である。カンボジアの国民性に深く分け入った分析が必要なことは論をまたない。しかし、ごくごく普通に考えれば、とてつもない怨念が蓄積されていることはまず疑いないといつてよいだろう。一見（いちげん）さんにはそんな込み入った話を開陳する必要がないということは長い内戦・抑圧を経てきた民にとってはイロハのイであろう。こうした怨念がいつか何かをきっかけに、噴出するのではないかという危惧を抱くが杞憂に終わることを祈らずにはいられない。

戦争を知らない世代が増加している。かれらにこの貧しさはどう映っているのだろうか。しかも、著しい格差が同時進行している。1998年に訪問した時と比較して変化したのは外国人向けの施設設備の大改善とプノンペンの近代的ビル群の出現だけであった。今後また10年して戦争を知らない世代がなぜこんなに貧しいのかと真剣に問い始めたら、再びこの国を積極的暴力を伴う大きな変革の嵐が襲わないとは限らない。それまでに、物質的な面だけでなく制度的な面からも「平和構築」が十分進んでいなければなるまい。

筆をおくにあたり、本実習の準備から、運営、帰国後の事務処理まで快く有能ぶりを発揮された山田満教授に改めて謝意を表す。駆け込み原稿に紙幅を割いてくださった本誌の編集委員、急ぎの印刷製本にあたってくださった行人社にも心から同様の謝意を表したい。最後に、他では得ることのできない貴重な情報をくださったインフォーマントの皆さんには、適切なお礼のことばが見つからないほど感謝している。